

図書館自己点検・評価について

- 報告書 -

平成12年度

目次

まえがき

平成12年度 自己点検・評価の報告
- 図書館のビジョンとその具現化 -(2)

自己点検・評価関係資料

- 1 基礎データ（平成12年度）(18)
- 2 関西大学図書館自己点検・評価委員会規程(31)
- 3 平成12年度 自己点検・評価委員会名簿(32)

まえがき

平成6年1月、本学図書館において「関西大学図書館自己点検・評価委員会規程」が制定されて、その活動を開始してから、本年は7年目にあたります。委員会発足当初から、大学の自己点検・評価委員会の活動と同様に、2年に1度報告することにしておりますので、今回は第3回目の報告となります。

委員会の規程の定めにしたがって、平成13年4月に開催する平成13年度第1回図書委員会に報告するとともに、『関西大学図書館フォーラム』2001年号に収録いたします。本学の教職員はむろん、学外の図書館等諸機関に公表して、大方のご意見、ご教示をいただきながら、本学図書館の存在価値の実質的向上を期して、たえざる努力を傾注する所存であります。関係各位のご支援とご協力を伏してお願い申し上げます。

今回は、近年の活動経緯をふまえて、「関西大学図書館がめざす方向 - ビジョン7項目 - 」に焦点をあわせた点検と評価を実施いたしました。本学図書館が、「学術情報のセンター的機能」のいっそうの充実をはかるべく、自らのあるべき姿を模索しつつ、平成10年12月に定めた具体策が「ビジョン7項目」であり、その実現に精力を集中させているところであります。

関西大学図書館は、微力ながら、館員が総力をあげて掲げた「ビジョン7項目」を着実に達成することこそ、利用者の多種多様な要望に的確かつ迅速にこたえる第一歩であると考え、これら喫緊の目標にとどまらず、関連する重要施策についても、誠実に遂行してゆく所存であります。

関西大学図書館を活用してくださる皆様のお力添えを重ねて切望してやみません。

平成13年3月31日

関西大学図書館自己点検・評価委員会

委員長 山野 博史

平成12年度 自己点検・評価の報告

図書館のビジョンとその具現化

はじめに

本学図書館が、自己点検並びに評価の活動を開始したのは平成6年であったから、今年度は7年目にあたる。図書館自己点検・評価委員会としては、大学の委員会と同様に、2年に1度報告書を作成することになっているので、本来であれば、平成11年度が第3回目の報告書を作成する年度になっていた。

ところがその年度は、図書館は平成10年12月に図書館ビジョン、すなわち「関西大学図書館がめざす方向」を策定していて、それを推進する第1年目にあたっていた。平成11年度の第5回図書委員会において、「図書館ビジョン推進についてスタートしたばかりのところであるので、今年度は、図書館自己点検・評価委員会内に設置されている作業部会で点検を進めてきた。その点検・評価の内容については平成12年度に報告する」旨提案し、了承を得て繰り延べていた。

ただし、「基礎データ(統計)」の報告は、継続して毎年度公表していくことに意義があり、委員会としては『図書館フォーラム』に掲載していくことには従前と変わっていない。そのうえ、“統計データについては、今後蓄積したデータを分析し利用者ニーズを把握して将来につなげることのできる有効なあり方について検討していく”ことを確認している。

平成9年度の図書館自己点検・評価委員会による第2回「報告書」の冒頭で、“図書館のサービスの基本とは”のところ、「全学をあげての新図書館建設に対する熱望と期待を支えとして設定された理念は風化させてはならず、それらを現実的な目標指針としていかすべく、十分なサービスを行なっていかなければならない」(『関西大学図書館フォーラム』第3号、1997)と記している。新図書館とは昭和60年開設の総合図書館であって、理念とは、情報化時代の図書館像として、“学術情報のセンター的機能を果たす”というものである。この理念にもとづいて、図書館活動のビジョン、目標および各基本方針が策定されるはずのものである。

同報告書はつづいて、「しかし、いつ、どこで基

本方針が確認され、それに基づく活動の展開をどのような機会に説明してきたのかは、やや不明確ではないだろうか。種々の議論や予算の調整過程などで定まってきたに違いない。けれど、それを確定し、広報する原則が明瞭でなければ、共通のものにならないのである。それは、図書館の行方が定かでないのと等しく、成熟への方途を模索しなければならない」と自ら厳しく記述している。

経緯

本委員会活動の7年間は、概要次のとおりである。平成6年度 図書館の実像を明らかにするため、自己点検すべき項目を設定。その項目別に現況を調査し調査票にまとめていった。

平成7年度 調査票にもとづき項目別に点検をおこない、評価を加えて実像を概観した。第1回の報告書として、図書委員会に報告するとともに、これを公表するため『図書館フォーラム』の創刊号(1995)に収載した。

平成8年度 第1回の本委員会の報告書で自ら指摘した事項、および、大学自己点検・評価委員会報告書「関西大学『学の実化』」(Vol.1, No.4, 1996)のなかで図書館に関して指摘された事項を抽出。本委員会に設置の作業部会において、改善状況と今後への取り組みを精査して中間報告をまとめ、前掲『フォーラム』第2号(1996)に収載した。

平成9年度 平成6年度に設定した自己点検項目のうちトップにかかっている「A利用・サービス」に焦点をあわせて、点検・評価をおこない、本委員会として第2回目の報告をまとめて、図書委員会に報告し、また『図書館フォーラム』第3号(1997)に収載している。第1回は全体を鳥瞰したのに対して、この第2回は個別事項を掘り下げて点検・評価することを意図したものである。

平成10年度 “図書館の行方が定まらないままに個々の業務のあり方を点検しても、いつかは行き詰まるし、へたをすると、自己点検・自己評価は単なる反省か自己批判に終わってしまう”として、図書館が今後将来何をめざすべきなのか検討。図書館長のもとに図書館ビジョン策定チームを編成。「ビジ

「ビジョン策定案」の答申をうけた図書館長は、12月1日「関西大学図書館がめざす方向 - ビジョン7項目」として定めたのである。

平成11 - 12年度 ビジョン7項目に則して具体的諸施策を展開して、一方で、本委員会の作業部会においてその点検をおこない今日に至っている。

大学の自己点検・評価委員会が平成11年度（平成12年3月）に公刊した第3回の報告書「関西大学『学の実化』」（Vol.3, No.4, 2000）には、「図書館は、まずビジョンを設定した。そして、その実現へ向けて具体的施策を展開しようとしている。その評価はこれからであろう。図書館に設置されている自己点検・評価委員会の活動並びに報告に期待するものである」（同報告書p.84）と記されている。

点検・評価の視点

平成12年度の本委員会活動は、委員会内に継続的な検討組織体として平成6年11月から設置されている作業部会において、昨年度につづいて検討してきた。その結果、

- (1) 図書館の自己点検・評価委員会は、前述のように、図書委員会での了解および大学の委員会による示唆にもとづき、「関西大学図書館がめざす方向 - ビジョン7項目」に焦点を合わせて、点検・評価する
- (2) 点検・評価の具体的視点は次のとおりとする
 - ア ビジョン7項目は何か
 - イ 推進体制と問題点
 - ウ 具体的施策の進捗状況と期待される効果
 - エ ビジョンの行方
- (3) 点検・評価した事項をまとめ、図書委員会において概要を報告するとともに、平成13年6月発行予定の本誌第6号に「報告書」として収載することにした。

ビジョンとは何か

図書委員会で承認の図書館ビジョン、すなわち「関西大学図書館がめざす方向」については、本誌『図書館フォーラム』第5号（2000）で既報のとおりであり、ここでは平成10年12月1日に定めたその項目のみ再掲しておく。

1 学術情報を提供するためのメディアの多様化

に対応しうる図書館をめざす。

- 2 関西大学図書館といえはすぐに思いうかべられるような、本学図書館独自の事業を展開する。
- 3 インターネットなどを通じて積極的な広報活動を推進し、関西大学図書館の存在と特徴をアピールする。また、図書館ホームページでは、広報的な情報以外に、可能な限りの情報サービスを展開し、「図書館電子カウンター」の役割を持たせる。
- 4 いわゆる「図書館の公開」を推進し、蔵書のより有効な活用をめざす。
- 5 図書館が展開する諸事業を支えることができる人材の育成に努力を傾注する。
- 6 より有効な職員の活用が求められている本学の現状に対応するため、図書館のすべての業務を見直し、アウトソーシングの積極的活用を図る。
- 7 業者パッケージの導入を前提に、図書館システム全体のオープンシステム化を推進する。

いうまでもなく、図書館ビジョン7項目は、個々別々に独立させて諸施策を講じていくことを意図していない。相互に関連して成り立たせているもので、優先順位を定めたものでもないのである。

今日、大学図書館を取り巻く環境は急激に変化し、図書館利用者のニーズも多様化していく。平成10年10月の大学審議会答申にいられているように、競争的環境のなかで個性輝く大学づくりが求められており、本学が平成9年7月に中間答申を得て平成10年9月に「関西大学の将来構想」をうちだし、創造的に前進する大学をめざして次々と新たな施策を講じている。

このようなとき機を一にして、大学の教学部局である図書館が、大学の理念の上にたつ大学の将来構想にてらして、また図書館の理念の上にたつてビジョンを設定したのは偶然ではない。今まで図書館も利用者のために日々改善の手を惜しまなかった。日常の改善の積み重ねは決して疎かにできない。けれど、図書館がおかれている状況を的確に認識したうえで、マンネリズムと固定観念を排除し、図書館運営のすべてについて定めた方向をめざしドラスティックに、またダイナミックに施策を展開していかなければ、潮流に向かっているいけないという認識に至ったのである。

M.K.バックランドはその著書『図書館サービスの再構築』(高山正也ほか訳、勁草書房、1994)の中で、紙メディア図書館から近代的な機械化図書館へ、機械化図書館から電子図書館へと大きな変革期を乗り越えていかなければならないし、電子メディアが興味深い新たな可能性をもたらしているとして、同著書の終りに、「図書館サービスの制約条件は今まさに変わりつつある。これは紙や図書館の蔵書をなくそうと言うのではない。誰もそのようなことを言っていない。これらの変化によってわれわれは図書館の使命と役割、サービス提供の手段についてもう一度考え直すことを求められている。過去100年の間で初めて、われわれは図書館サービスを再構築するという、困難であっても、またとない素晴らしい機会に今、直面している」と結んでいる。

平成11年度より開始した図書館ビジョン推進の成否は、21世紀の本学図書館の在りようを左右するといっても大袈裟ではないであろう。本学図書館は、「今しかできない」ということに、意識の大半を傾けて、各施策を講じていかなければならないのである。

ビジョンの推進体制と問題点

図書館長のもとに「図書館ビジョン策定チーム」を編成したのは、平成10年5月であった。

インターネットを中軸としたネットワークの発達、CD-ROMや電子出版など情報のデジタル化によって、紙を中心としていた図書館から、多様なメディアを包含した図書館へと転換していかなければならない、極めて大きな変革期にあった。チームの編成および検討の開始ができたのは、機敏に手だてを講じていかなければ、本学図書館は立遅れていく極めて憂慮すべき状況にあることを認識した職員数名(のちチームのメンバーに指名された者)の発議と、図書館長の「図書館改革を断行する」という強い信念によるものであった。

しかも、大学財政、人的物的資源が厳しく困難な時期にある。このような時こそ、本学図書館はみずからの進むべき方向を見定め、状況変化に対応して新たな展開を迅速に進め、自他とも認め認められる図書館の存在に高めていかなければならないとして、チームはまず次の3つのポイント(柱)をおさえたのであった。

メディアの多様化に対応しうる図書館
 独自性のある事業の展開、図書館の存在と特徴をアピール
 業務改革の推進、図書館の使命を達成しうる
 人材の確保

1 推進体制

また、よくありがちな高邁なスローガンではなく、本学図書館の特徴と持ち味をいかした施策を講じることができ、そのうえ、図書館利用者のみならず、本大学、本学校法人はもとより、いずれの本学構成者にも理解と支援がえられる内容に展開できることを期したのである。それが、先に再掲した「ビジョン7項目」であり、具体的施策の目安を例示した詳細は、既に『図書館フォーラム』第5号(P.71~74)に掲載しているとおりである。

同チームから答申をうけた図書館長は、平成10年12月、全館職員を集め「めざす方向」として示したのであった。翌平成11年1月、ただちに「図書館ビジョン策定チーム」を「図書館ビジョン推進チーム」に改編した。

ビジョン推進の第1年目として、これを図書館の最優先課題に位置づけて取り組みを開始した。ところが、事務組織の改編、閲覧業務部門のアウトソーシング導入、および、サービス主導型と銘打った図書館ホームページへのリニューアルなど、いくつかその端緒を切ったが、進め方に大きな問題があった。

本報告書冒頭のはじめに記したように、「いつ、どこで、基本方針が確認され、それに基づく活動の展開をどのような機会に説明してきたのか」明確ではなかったことに起因していたと思われる。

推進チームのチーフを中心に具体的施策を検討してきたなかで、これの推進体制のあり方について図書館総体として厳しく反省し、このことについて、図書館長は平成12年3月31日、新年度の体制に向けて全館職員を集め、ビジョン推進にかかる取り組みについて改めて指示をした。そのうえで、明解なルールで、適時適切な意思決定を迅速にでき、しかも今後確実に推進していくことのできる体制づくりについて、新たなビジョン推進体への改編の意向が示された。

翌4月から改編された「図書館ビジョン推進会議」が図書館課長会議のもとに置かれ、そのもとに、いくつかのプロジェクトチームを構成したのである。同時に、図書館ウェブサイト運営委員会を課長会

議の直属とし、正規に図書館ホームページ管理者であるウェブマスターを指名している。

2 問題点

では、どのような問題点があったのか。基本的には、上記のように明解かつ迅速性に乏しかったのである。図書館の今後にとっても、本学の他部局の今後にとっても参考にもなればと思料し、その主たる反省点を記し、また、図書館長が全館職員に指示した事項を再録しておきたい。進め方においての、大きな問題点は次のとおり。

推進の中心になる「図書館ビジョン推進チーム」が実質的な機能をしなかったこと
責任体制を明確にしなかったこと
図書館全体で進めるという意識を欠落させたままであったこと
実現の端緒についた事項についてそれを点検・評価することなく、また、発展継続していく体制を明確にしてこなかったこと

図書館長はこの状況を憂慮し、危機的事態の認識に立って、あらためて平成12年3月31日に指示した内容は、次のように至極当然の内容であった。その当然のことが実は今でも図書館の組織にあっては困難なことである。

新体制（この翌日の新年度から、図書館ビジョンにもとづいて、図書館事務組織が改編されている）のもと、「ビジョン」のいっそうの実現に向けて、図書館全体が一丸となって取り組むこと
個性的かつ独創的な仕事を、智恵をしぼって全員が共有できる業務へと進化させること
マンネリズムと固定観念を排し、積極果敢に業務の充実を図ること
各自が仕事の優先順位を誤ることなく、館内での情報公開や政策展開を公正かつ明朗に押し進めること

平成12年4月1日、新体制にもとづく「図書館ビジョン推進会議」はスタートし、早速そのもとに、オンラインサービス充実プロジェクト、アウトソーシング活用プロジェクト、オープンシステム化計画プロジェクトの3プロジェクトチームを置き、

つづいて 研究者サービス検討プロジェクトを追加した。また、 のアウトソーシングのチームを閲覧部門と収集整理部門の2つに分け、5つのチームが編成されたことになる。

この平成12年度の推進過程においても、いくつかの問題が露呈している。

その一つは、6月末を期限として、5つのプロジェクトチームを発足させ中間報告を求めたが、ビジョン推進会議の意図とに乖離がありすぎた。ビジョンをもって改革改善をすることは、“将来に付託できる道”を付けようとするものである。にもかかわらず、チームの考え方はやや保守的でしかも現状維持に近い提案にとどまっていた。推進会議はあらためて各チームに意図を説明して再検討を促し、最終報告をうけた。

第二に、これを評価すると、「大学図書館が大変革期の渦中にあるなか、定めたビジョンの推進においてドラスティックな展開が求められているのに、ダイナミックな提案がみあたらなかった」のである。第三に、「プロジェクト間の連携をとっていない。今、図書館職員の力量が問われているときに、なぜプロジェクトなのかさえ承知されていないフシがあった。計画完遂への意識が欠如しているといわざるをえない」というものであった。

期限が到来したプロジェクトチームはこの任を終了させ、各チームからの最終報告をベースに推進会議が中心になって取りまとめていくことにした。そのうえで、責任をもった体制で推進するため、プロジェクト機能を図書館事務組織（3課）上の課業として所管を引き継いだ。

本学図書館は、昭和60年総合図書館開設のコンセプトである“学術情報のセンター機能を担う”ことをもって、以来これを基本理念にしてきた。この一定の理念のもとに、平成10年12月に「ビジョン」を策定した。そして、後に述べる具体的施策を展開しているのである。

ただ、ビジョン乃至は基本構想または基本目標といわれるものは、“めざす方向”であって普遍のものではない。また、具体的施策も一気に成し遂げられるものではない。共々議論の場があって、拡大し、成長していくものである。熱い空気と、それに通じ合うことが最も大切である。そして、図書館の認知と存在をアピールするに他ならないのである。

つまり、図書館は何をめざし、何をすべきなのが求められているのである。1990年、G .ハメル

とC.K.ブラハラートとがいうように、コア・コンピタンス core competence(利用者認められる価値を作り出し、高める。優れた特色を創出し、競争的戦略的に思考する能力、スキルを束ねて総合化していくこと。中核的組織力)が必要なのである。すなわち図書館のねらい目と“売りは何か”ということであろう。これが、ビジョンとその推進である。図書館はビジョンを示した。その具体的施策に期待が寄せられてくるのである。

3 自己点検・評価活動とのかかわり

冒頭経緯のところでも記したとおり、大学の自己点検・評価委員会は、図書館のビジョンおよびその具体的施策の展開を図書館の自己点検・評価委員会の活動と報告に期待している。では、大学の委員会はどのような「活動」を期待しているのか。

大学の委員会規程には、「本大学全体の教育研究水準の向上を図るため」とあり、第1回の報告『学の実化』平成5-6年度版)における学長の発刊の辞に、自己点検・評価は「大学が行っている諸活動の組織、内容、方法などの改善に資するために、われわれ自身のために行うもの」であり、「この報告書で指摘されている本学の問題点、ないしは改善が必要とされる指摘事項は340余項目に及びます」とある。そのうち、図書館に対する指摘事項は、41件であった。図書館に設置の自己点検・評価委員会の報告(平成7年度版)自身は132件の指摘事項をあげていた。

しかし一方で、大学も図書館も報告書を公開するという事は、その実像を公開することであり、かつまた、存在をアピールすることに他ならない。改善しなければならない事項をあげるにとどまっていたは、方向が見えてこない。あげられた指摘事項には本来指針が併記されるべきものであろう。また、大学や図書館の存在をアピールするという事は、誇るべき点、施策の進行中の様子、改善のよすが、などを客観的に説明することである。

大学は平成6年4月に委員会活動を開始して以来、3回報告書を公開している。第1回目で指摘された事項が第2回目ではなかったり、第1回目と第2回目での指摘事項が第3回目にはなくなっているということは、若干の分析を試みしてみると、改善された、改善の方向が見えている、指摘を繰り返すに及ばないか、もしくは、忘れられたか、のいずれかであろう。客観性を欠くいいかたではあるが、

指摘する価値判断の曖昧さにも起因しているかもしれない。このようなことを念頭におくと、直近の報告書が最も参考になろう。大学の報告書の第3回目、および図書館の報告書の第2回目において、“善い”と評価された点と、“改善を要する”と指摘され、その指針の提言が示されたものをあげてみた。捉え方にもよるので、下表に示す件数は一応の目安としての件数である。

	a 善いと評価された事項	b 改善点など指摘事項
A 大学の報告書 1997-98『学の実化』	11	12
B 図書館の報告書 平成9年度報告書	7	14

上表にあげたうち、主な内容を列挙(報告書掲出順)してみると、やはり、図書館の将来への在りようにつながるものばかりであった。

【A a】

- ・学習情報提供には、図書館が目指しているオンラインファレンスのようなWeb型受発信システムなど含めたネットワークを通じてのQ&Aのコミュニケーションなど、種々の試みがあってよいと考える。
- ・図書館では、WWWインターネット環境を駆使して、利用者ニーズに対応していこうとしている。図書館創設以来伝統に培われ蓄積されてきた学術図書資料群並びに古典籍の重要性に鑑みて、その継承を十全に行うことは当然であるが、その一方で変革していかなければならない。情報技術の急速な進歩、社会状況の変化(ボーダレス現象など)情報サービスの増加と多様化及びこれらに伴う利用者のニーズの変化は、要するところ、統合的に、シームレスでしかも横断的なサービス、つまり「アクセスを容易に」できる環境への改革の不可避性を示唆している。
- ・大学評価アンケートは「図書館の蔵書や施設をどう思いますか」の問(Q60)に、第1部学生全体で、“大変充実している”と答えたものが約50%、“ある程度充実している”も含めると82%と、前回の68%をかなり上回る。第2部学生では同項目で84%にも達していた。
- ・本学では伝統的に集中方式をとっている。分散方式、集中方式それぞれに得失はあるだろうが、集中方式には、いずれの学部や大学院研究科の学生教職員であっても区別なく、図書資料を1カ所で閲覧

でき、学際領域の研究に資することができる点に大きな特色がある。

- 1994年に第2部が千里山キャンパスへ移転したことに伴い、開館時間を天六分館時代と同様に延長し、日曜日も開館している。2階の学習図書館機能を中心とする開架閲覧室では、順次新刊書が買い揃えられていく一方、毎年繰り返して備え付け図書のリフレッシュが行われており、教育並びに学習の環境条件の維持に努められている。
- 図書館は、その基本理念である「学術情報のセンター的機能の任務を果たす」を達成するために従前からの図書館本来の任務を「継承」しながらも、インターネットやマルチメディア関連機器等にもみられるように、情報化の飛躍的な進展と多様化するニーズに対応し、図書館自ら「変革」していこうとしている。
- KOALA : *Kansai University OPAC for the Library* は、キャンパス内はもちろん、自宅からも活用できる。他の大学にはみられない充実した蔵書検索システムとして、インターネットホームページを通じての一般公開のなかで、学外からの評価は高い。アクセスを容易にしているのと、使い易さに定評があるのは、自館開発であることと、試用期間中にアンケートによって館内で多くの学生から意見や要望を集め、それを反映していったからであろう。なお、KOALAは全国数少ない英語Web版でも提供しているため、本学の外国人留学生や研究者のみならず、学外の外国人研究者からも好評を博して、誇るべきである。
- OPAC (KOALA) の充実には欠かせない所蔵図書の書誌・所蔵等目録データの品質向上に努めてきている。目録情報の遡及作業7ヵ年計画は第6年目まで進捗した。
- CD-ROMサーバのドライブを増設し、高槻図書館や学内の機関等からも検索できるようにした。KOALAの利用とともに、各検索コーナーは盛況な利用状況を呈している。
- 漢籍を中心とした「内藤文庫」の目録を、CD-ROM版で編纂刊行した。漢字の正字体繁体字、異体字、別字・略字・俗字体など日本のコンピュータで扱うことが困難な状況において、本学が本邦初ともいえるべき漢籍のCD-ROM版目録を完成し得たのは快挙であろう。これをKUL-bijouと名づけていて、学内外から評価を受けつつある。
- 図書館ホームページを改訂し、学術情報を中心と

したリンク集を掲載するとともに、新たにKOALAに加え、学内限定ではあるが、「洋雑誌目次検索」システムと「電子ジャーナル・サービス」の運用を開始している。発信型のサービスへ転換していることは、新たな図書館ビジョンの実践として大いに期待できる。

【A b】

- 学生への学習支援の展開にとって今日的将来的に大事なポイントとして、関係する機関部署間においてシームレスな、すなわち継ぎ目のないサポートが必要であることを指摘しておきたい。
- 図書館やテプラライブラリーの利用案内にしても、英米とは違い図書館を利用したことのない新入生が大半であることへの配慮が必要である。学ぶ目的の意識を高めるような指導日程と、年間及び4年間のガイダンス計画をあらかじめ提示するとともに、大学への帰属意識を高める行事を計画するべきではないか。
- 今回の「大学評価アンケート」では、(前述のとおり、図書館の蔵書・施設・設備について、第1部学生は82%が良いと評価しているが)総合情報学部のみをみると、“あまり充実していない”、“まったく充実していない”をあわせると50%以上が不満を示し、前回のアンケートよりも厳しい。
- 総合情報学部の学生は高槻図書館が大方の利用場所となるため、その不満は理解できる。むしろ図書館全体のシステムとKOALAでの検索、総合図書館との相互貸借制度の活用をもっとアピールしてはどうか。
- 今回は大学院学生にも「大学評価アンケート」が実施され、「研究に必要な図書・資料の入手に困難を感じていますか」との問(Q22)に、全研究科を通じて“やや感じている”が約39%、“大変感じている”が12.5%もあった。これも、よく検討することが求められよう。
- 図書館に限らず、サービスの現場では、一定のレベルを維持でき、安定した対応が継続できることが基本である。利用者からの信頼がサービス業務の根幹である。図書館は人員減にもかかわらず、また資質が一定していないにもかかわらず、ニーズの変化により、サービス業務の拡大を求められる一途にある。さすれば、これを解決するには、将来に鑑みても、業務の一部を外注化するというアウトソーシングの導入を視野に入れることが必

要であると思料する。

- ・情報処理センターと図書館並びに関係機関と連携して、電子メディア創生等の技術開発を行い、メディア利用環境を整備統合して各機関は分散利用できるように「統合/分散」型における、その統合的な組織機構を作る必要がある。
- ・図書館の蔵書形態として、主として分散型と集中型があるが、本学の総合図書館は後者の集中型に属し、その利点は、(ア)多くの資料を1ヵ所で閲覧・調査が可能である、(イ)資料の重複を避けることが可能である、(ウ)大型コレクションの購入が可能である。以上の点については、非書籍形態資料でニューメディアに関しても同様であり、マイクロ資料、AV資料、CD-ROM、フロッピーディスクなどの情報源の総合的な有効活用が容易である。しかし、集中型では必要な資料が手元になく、小回りが利かない等欠点があるので、今後この点について改良すべきである。
- ・外部データベース等新情報検索システムの提供は、従前のシステムと比較して時代のニーズにあったものであると評価できる。しかし、ライセンスの契約に絡む問題があるために学内からのアクセスに限定されている。今後、学外からのこの制限を緩和あるいは取り除くことができないか、また文献のコピーを直接入手できないかを検討する必要がある。
- ・文献情報データベースの使用状況については図書館では一切把握できていないので、今後、詳細な文献の出典、文献情報データベースについて調査し、検討する必要がある。
- ・変化の最も大きいメディアCD-ROMに注目すると、1998年度にはその前年度より約6倍の購入金額に増大している。これは、これまでのメディアより、より大容量かつ管理面上の利点によるものと考えられる。今後さらに増大することが考えられ、それに対応する環境整備の充実が必要となる。
- ・大学図書館を取り巻く環境は大きく変化しようとしている。情報化の中の利用者ニーズも同様である。学術情報の中枢を担う総合図書館としては、文化遺産と知的財産を保持しながらも新しい社会環境に対応しなければならない。このような状況下、本学図書館は新たなビジョンを定めた。状況変化に迅速かつ機敏に対処することが、21世紀に向けた緊急の課題である。

【Ba】

- ・レファレンス関係の図書資料整備は十全に行っており、EU資料センターに指定されていることから、関係図書資料の整理と利用サービスに万全を期している。
- ・近年、文献情報の環境は電子情報の進展に伴い、利用者の要望に即応してCD-ROM検索については・・・クライアント/サーバ方式を導入したネットワーク対応に改変して、館内および学内LANに接続している。高槻図書室や学部資料室からの検索利用の拡大も図られた。・・・夜間や日曜開館時にも開放したことにより、第2部学生の利用促進にもつながっている。
- ・オンライン情報検索(IR)は、・・・利用が頻繁になるに従い、個人への課金負担が多くなっている。このため、平成9年度から、情報検索に要した費用の半額を補助する制度を開始し、評価をうけている。
- ・施設や空調採光にかかわる利用者の環境は、総合図書館開設12年を経過しているが、ランニングコストが高く予算がかさむなかで、関係機器の保守、改造、清掃等メンテナンスに予算配慮を得て、他大学に比べても良好な環境を提供しているといえる。
- ・パソコンや複写機器等の更新も、予算の制約はあるけれども、利用者優先で配慮されてきた。
- ・図書館では年間を通じて種々のガイダンスを実施している。・・・第1段階としての新入生オリエンテーション。・・・指導週間に引き続き・・・「図書館ツアー」を実施し、館内案内と実際の利用の仕方をガイドすることにより、指導の実をあげている。・・・第2段階は、1回30分、主としてオンライン目録の使い方の指導である。4月から12月まで、・・・特に4月は集中して1日4回実施し、効果をあげている。・・・学部学生は上位年次に進むに従い、主題文献探索法が重要になる。・・・講義時間を割愛し授業の一環で行われる図書館利用実習は担当の教員と学生の双方から評価をうけている。
- ・図書館の公開について論じられることが多いが、本学図書館は今日まで閉鎖的であったわけではない。・・・他の大学や研究機関あるいは吹田市の図書館や全国の公共図書館からの紹介を受けた研究者、学生、市民の利用の便に供している。また、

図書館所蔵資料を展示公開して、関連の講演会を開催しているし、全国の図書館、美術館、博物館等からの出陳依頼により所蔵資料を貸出してその地域住民の展覧に供することもしている。この種の公開活動について、関係者の好意的な評価を得ていることはいうまでもない。

【B b】

- ・崇高な理念をいかにして日々の図書館サービスの向上に結びつけていくか。・・・利用者の要望に合致させるべく、図書館の将来像を具体化させるとともに、3～5年の中期の実施計画を早急に策定すべきである。
- ・CD-ROMを中心とする電子ブックや電子ジャーナルの出版も増えていく傾向にあり、今後さらに紙ベースの図書資料を電子メディアへ置き換えるとともに、費用のことを勘案しながらではあるが、可能な限りネットワーク型のCD-ROMの購入が望まれる。
- ・また、図書館の事務やサービス業務に、インターネットを積極的に活用しなければならないと考えている。
- ・環境は整っていても、「情報のコンタクト」としてのサービス機能は果たしてじゅうぶん機能しているか。・・・利用者にとってレファレンスサービスがどのようなサービスであるか、図書館における重要な活動であることが明確に理解されているかが問題であろう。・・・広報活動の展開によって図書館の姿勢を明らかにしていくことも不可欠である。
- ・「情報とのコンタクト」をもってレファレンス・サービスを活発に展開していくためには、スタッフの力量の向上と人材確保が重要である。理念や掛け声のみに終わらないよう、人事施策にはたつきながら、要員計画や研修計画等による強化策を講じていかなければならない。
- ・サービスを支える環境整備はもとより、開館時間、開館日数も重要な要素である。
- ・図書館基準で限度とされる配架率70%を超え、現在80%に及ぼうとしている。この書庫狭隘化にいかに対処するか。・・・早急に書庫の拡充計画を検討しなければならない。
- ・第2部学生が、開館日数の増加要求よりもむしろ開館時間の延長を要求している。
- ・大学と図書館を取りまく環境は、利用者の要望と

ともに大きく変化している。・・・他大学でも方針変更しているように大型汎用機システムを離れ、UNIX環境下での開発・運用が一般的になってきた。いわゆるクライアント/サーバ方式であり、システムのオープン化である。インターネットを中軸に、Web型のシステムが望まれる。

- ・図書館内において利用者自らがインターネットを通じて、学外データベースに接続してアクセスできる環境を整える必要があるだろう。
- ・蔵書量を誇る本学であっても、本学にない文献資料を全国規模、国際規模で求めようと需要が増えているのである。これはネットワークの環境整備を常に図っていくことの重要性を示唆しているだろう。
- ・上位年次学生の入庫指導であるが、教育職員や大学院学生と同様に入庫資格をえるためのものであり、現行の30分の指導では行き届くか、心配な面もなくはない。
- ・サービスの目的が確認されているか。図書館サービスがどのような施策にもとづいて展開しているか。明解に説明され、理解が行き届いているだろうか。
- ・(図書館の組織が)当初の思惑どおりに機能しているか。・・・図書館全体として、いま何が可能で、何が可能でないのか。図書館の歩むべき方向や克服課題が考察されなければならない。

以上、大学の「報告書」平成10年版、および図書館の「報告書」平成9年版から主要事項を抽出した。上にあげた指摘事項について、図書館はビジョンを策定するまで何も改善改革の手だてを講じてこなかったわけではない。図書館は日々利用者のために改善の手を尽くしてきた。微細な工夫や改善であっても重要である。なおざりにはできない。

けれども、日々の改善も、施策を伴う改善、改革も、大きな矛先をもって、すべてがその目指す方向につながっていかなければならないのである。

図書館の諸活動について、大学の委員会報告書並びに図書館の委員会報告書には、幾多の指摘と改善、改革への示唆が供されていた。あらためてこれを点検し概括してみると、【B b】については、概ねビジョンの矛先に向かって、その一端は に事例を示すように、既に改善がおこなわれている、改善に着手し進行中、検討が進んでいる、の何らかの結果をえていることが分る。また、ビジョンの方向

につながっていかうとしていることも確認できる。

【A b】に関しても同様であるが、今、大学の委員会で、指摘した事項について、既に改善・改革されたか、改善・改革を要する点、改善・改革ができない理由について、総点検がおこなわれており、それを[達成度]と[難易度](A:極めて困難、B:多少の困難はあるが可能である、C:可能であり達成すべきである)の別で評価していくという作業が進められている。平成13年度中には第4回目の報告書として開示される予定になっているので、これに待ちたい。

策定したビジョンを問い直していくことは勿論、策定したビジョンに即して施策に反映していつているか、それを確認していかなければならない。

ビジョンの具現化

平成10年5月から図書館長のもとで検討していたビジョン策定チームは、策定案の検討と並行して、ビジョンは具現化できなければ、ビジョンは単なる看板に終わり、“結構な能書き”に過ぎないとして、種々具体的施策を試行している。また、既に計画中の事案も「めざす方向」にはずれていないか点検し、軌道修正していったのである。

1 着手してきた具体的施策

着手してきたものを、平成10年度の『事業報告書』(学校法人関西大学)に記載のなかから抽出し要約してみると、主なものとして次のものがあげられる。

OPACの充実を目指して取り組んでいる「目録情報の遡及入力7カ年計画」は6年目を終えた。この事業には、ひきつづき「OPAC・データベースの拡充」として私学事業団から補助金を得ている。

ニューメディアに対応した、漢籍を中心とする『内藤文庫目録』をCD-ROM版で刊行する計画を進捗させた。

図書館のアピールと蔵書の公開を意図した展示「私家版 三大美書を中心に」「マザーグース」「王朝和歌の世界」のほか、特別展「絵入り本の系譜」「いしいひさいち展」を開催、好評を博した。

平成8年10月開設した図書館ホームページを

改訂した。学術情報を中心としたリンク集を掲載した。

ホームページとリンクさせ、「洋雑誌目次検索」システムと「電子ジャーナル・サービス」の運用を開始した。電子ジャーナルは、“オンラインジャーナル”とも呼ばれ、最近では“E-journal”という表現が多い。

本学蔵書検索システムについて、Web版を開発し平成9年度学内でのテスト運用をへて、これをKOALAと名付け、平成10年度には学外インターネット上で公開した。また、図書館内に検索用端末を増設した。

利用案内、利用指導について、日常的な利用案内、習熟段階別の指導、CD-ROM検索利用ガイダンスやKOALAガイダンスなどその充実を図っている。

つづいて平成11年度は、図書館ビジョン推進の第1年目となった。以下、平成11年度および平成12年度において、どのような具体的施策の端緒があったのか、みておきたい。平成11年度の『事業報告書』と『四か年のあゆみ 1997~2000』(学校法人関西大学)の記載内容から特出されたものを要約して、確認しておく。

平成9年度のCD-ROMサーバを増設した際、高槻図書室や学部資料室からでも検索できるようにした。これを、平成11年3月、より公開性の高いサーバにリプレイスし学内LAN上でのサービスを開始した。また、情報データベースとして提供可能なCD-ROMは、ネットワーク情報源の一つとして図書館ホームページでも公開している。

平成12年7月の新大学院棟竣工を機に、図書館と大学院棟から図書館へのアクセスを短縮するため、研究者専用通路を設置するとともに、研究者サービスの向上を目指して研究者カウンターを設置した。

図書館ホームページについては、サービス主導型のものへとさらに改訂を進め、図書館の新しい窓口として「電子カウンター」と位置づけ、オンライン・レファレンスのサービスはもとより、オンライン・ジャーナルやWeb上の外部データベースもホームページを通じて提供した。また、電子展示計画も検討して

いる。

平成10年度から開始したオンライン・ジャーナルのサービスも、平成12年9月にはホームページや学内LANを通じて1000誌以上を提供している。

平成12年度から2年計画で、閲覧サービスについてアウトソーシングを導入することにより、日曜日に加えて国民の祝日も開館し、平日の夜間開館時間の延長を図った。

OPACデータベースの拡充について、「目録情報の遡及入力7ヵ年計画」の事業を平成11年度に終え蔵書の96%を完了し、平成12年度から「第2次遡及入力3ヵ年計画」により、個人文庫の遡及を推進している。

漢籍を主とする「内藤文庫」のCD-ROM版目録をKUL-bijouと名付け刊行して、学内外に供した。評価をえて、平成12年8月、私立大学図書館協会より「協会賞」を授与された。

2 ビジョンの進捗と展開

さらに、その後の進捗と展開について点検してみた。

図書館は、本学の長い歴史と伝統によって蓄積された蔵書に培われてきた従前からの図書館機能を、今後将来にわたって十全に継承していくことには変わりはない。しかし、一方でインターネットを中軸とした情報ネットワークの急速な発達にともない、情報提供メディアの多様化が顕著になってきた。利用者のニーズもこの方面への高まりが生じたのである。

(1) メディア多様化の対応と、オープンシステム化の計画推進

従来のように印刷物を単に入手し、閲覧・貸出するという提供サービスとちがって、CD-ROMやDVDなどのメディアを購入し学内のネットワーク上に配信するのみならず、世界のネットワーク上に公開提供されている新しい学術情報源を迅速に入手し、かつ提供していくことが求められている。いわば、情報コンテンツが多様化し、学術情報サービスのあり方自身も大きく変化しているのである。

大学の図書館は、従前からの図書館機能を堅持し、また一方で、ネットワーク上の情報を収集し整理していく中心的存在であり、それを具現化する仕掛つ

まり情報インフラとアクセスしやすいシステムづくりが不可欠という他ない。これが一般にいう「電子図書館機能」であろう。

では、その「電子図書館機能」が本学図書館においてどのように整備されつつあるのか。

図書館では、「電子図書館機能の充実のためには、冊子体・CD-ROM等ニューメディアにくらべて、検索機能など利用効率、図書館へこなくても24時間利用できる利便性、最新の情報が入手できる情報の即時更新性、利用ごとの課金のない定額制、保管場所と保守の不要性など、優れた外部データベースを効果的に活用して、学習・研究支援のツールとして積極的に導入する」という、基本的な考え方にもとづいて展開している。

ニーズと対費用効果を予測しながら導入するという収書方針にはかわりがないが、Web of scienceのように経費が莫大なものについてはトライアルを実施しており、さらに多くの意見を徴して決定していかなければならない。幸いにも各種データベース導入計画について、「図書館電子カウンター」を通じて好意的な評価が寄せられている。

計画中の図書館オープンシステム化とともに整備を図っていくことはもちろんであり、レスポンス、利用資格認証、館内インターネット環境の充実、利用者への広報と利用者教育、LEXIS-NEXISを取り扱ってきた法学研究所、FirstSearchを図書館と重複して導入している経商資料室など学内図書資料所蔵機関との一元化にむけての調整、購入予算編成の見直し、など課題がある。

図書館オープンシステム化計画については、図書館ビジョン推進会議での策案をとりまとめ、平成12年度当初から大学と法人および本学情報処理センター等関係部署に打診しながら、図書委員会での審議を仰ぎ、10月、図書館長は学長あて「図書館のオープンシステム導入による学術情報サービスの充実について」により要望してきた。

インターネットとパソコンの急激な普及は、図書館利用者のニーズも多様化する。研究者は自分の所属する大学を入り口として、必要な情報の入手を求めため、図書館に対しては、学内外という枠にとらわれないサービスを強く要望されるに至っているのである。これまでの「図書資料の管理を中心とする図書館システム」から、「学術情報を提供するサービス主導型の図書館システム」への移行を余儀なくされている。本学においても、めまぐるしく変

化する情報環境に迅速に対応し、サービスの質の向上と安定を図るためには、柔軟で拡張性のあるオープンシステムの構築が絶対条件になってきた。

既に図書館は、“学術情報のセンター的機能を果たす”ため、図書館が学術情報の拠点として最大限に教育研究活動を支援するのに、研究サービスの拡大と質的充実が課題であるとして、「電子図書館機能」の充実にむけて、メディアセンターとしての機能、ならびに図書館の情報源に加えて、上述のネットワーク上の情報源をも対象としたナビゲート機能の充実に取り組んでいる。オープンシステム化もその一環であり、「電子図書館機能」の充実のために欠かせない情報インフラの整備としての必須条件になっている。

平成12年10月には学長の支援により、11月には法人による中期の財政にかかる審議をえて、予算化も目処がつくに至り、計画意図を理解した業者の選定があって、平成13年度後半には本稼働する運びとなった。

オープンシステムとは、通信、ネットワークの技術の向上により、異機種のコピュータやネットワーク間の相互接続が可能なシステムである。オープンシステムを利用することで、学内LANやインターネットを通して情報資源の有効活用を図り、サービスの向上、業務の効率アップ、コスト削減が可能となる。計画中のオープンシステムは、書店や外部の関係システム等を緊密に連携させるばかりでなく、平成14年度の実現を期して、研究所や学部資料室、第一高等学校・第一中学校図書館など学内の図書資料所蔵機関の収集整理業務を集約し、支援することをも視野に入れたものである。

(2) サービスの拡大とアウトソーシングの積極的活用

図書館は、ビジョン項目の一つに「より有効な職員の活用が求められている本学の現状に対応するため、図書館のすべての業務を見直し、アウトソーシングの積極的活用を図る」ことをあげており、このことにより、まず図書館の事務組織の改編に着手したのである。合理的な業務処理をおこない業務間の連携を密接にするため、同種の業務を一つの組織にまとめる、資料・情報提供に関する業務に大幅なアウトソーシングを計画して、それに対応した組織にする、かねてより求められている各種サービスの拡大、および図書館が計画しているさらに充実したサービスの提供にふさわしい組織にすることを

目的とした。

まとめ部門は、管理・運営部門はこれを運営課、資料・情報の提供部門は閲覧参考課、資料・情報の収集・整理部門を学術資料課と、旧4課体制を3課に改編したのである。この組織改編に期待される効果として、

業務部門別の組織になるため、重複する業務をなくすことができ、統一した指揮のもとで機動的な要員配置ができるなど、合理的業務遂行とその結果充実したサービス提供がおこなえる

資料・情報の提供に関する業務に大幅なアウトソーシングを導入するが、そのコア業務である企画運営・業務管理というマネジメント業務について専念でき、参考業務における専門性を発揮して、求められている研究者サービスにウエイトをシフトできる。業務部門別組織になるため、コア業務を専任職員が担うことにより、部門ごとに徹底したアウトソーシングを推進することが可能となる

アウトソーシング導入は決して人員不足を補うものではないとの認識にたつて、その導入によって、大改装により一新したホームページを中心として「電子カウンター」サービスを活発化しなければならない人材と資質に振り向けられ、変革の時代に対応できる、と考えたのがねらい目である。

のちに説明するアウトソーシング導入計画と、この組織改編計画は不可分のもので、これを人員計画も含めて3年計画で推進するものであったが、大学、法人の積極的推進の理解により2年の計画（組織改編に伴う初年度の専任職員は、前年の51名を45名体制すること）での完了をめざしたのであった。

次にサービスの拡大についてである。第2部学生の「開館時間の延長要求」は、学生の組織から大学の第二部協議会を通じての長年の要求であった。夜間の授業終了後図書館で十分に学習できる時間が確保されてこなかったし、書庫図書の利用も制限されていて不自由であったというもの。加えて、図書館に近接して大学院教育充実のため新大学院棟「尚文館」が建設されるに及び、昼夜にわたる研究を支援していくことが必然の要請となった。

求められるサービスは拡大する一方であり、それに応じようとすればするほど人的資源は枯渇していく。利用者からの信頼がサービス業務の根幹であり

ながら、時間延長、開館日数増加、質的一定のレベル保持を要求されても困難である。1日を専任職員が4交代制で勤務するほど不経済なことはないので、学長と法人に計画を説明して、大学の自己点検・評価委員会が示唆しているように、「アウトソーシングの導入を視野に入れること」にしたのである。

このとき学長から、「図書館はいままで少しずつ利用者にとって善いことをしてきた。でも、利用者はすぐそれに慣れてしまって、当たり前のようにしてしまう。この際、計画は大変結構ですから、思い切った施策をやってください」との了解と、法人からの財政的支援を得て、実施できたのである。

平成12年4月から、総合図書館の開館時間を22時まで延長、従前からの日曜日の開館に加え国民の祝日も開館、開館時間中はレファレンスカウンター以外書庫の利用など利用者のエリアのすべてを利用可能にして、利用サービスの拡大を図った。17時以降の閲覧業務と日曜日・祝日の閲覧業務をアウトソーシングによることにしたのである。ただし、レファレンスカウンターは専任職員により20時まで対応していくことにしている。

また、新大学院棟と図書館が回廊で結ばれ、図書館と直結するところに研究者専用通路と研究者カウンターを設置したことは、先にふれた。

2年計画で進行することとなった閲覧部門のアウトソーシングは、平成13年度からは開館から閉館まで終日アウトソーシングによることを基本としている。今後、図書館は、大学や法人はもとより利用者から厳しく評価されてくるであろう。時間や日数の拡大はおおかたの好意的評価をうけている。第二部の学生自身その自治委員会名で、全紙大のおおきな掲示を出した。「総合図書館開館時間延長 二部生にとって長く待ち望んでいたことが、遂に実現!! 二部生の皆さん より一層図書館を利用しよう!」と。

しかし、利用の拡大は時間や日数も大事な要素ではあるが、また、これがなければ望まれる利用拡大は“絵に画いた餅”になるうが、やはりサービスの質が問われるのである。開館時間の延長や開館日数の増加は、方法を頓着しなければできない。けれど、これはただ開けたにすぎない。まず、アウトソーシングによって開館環境の拡大を可能にして、つづいてアウトソーサの参画も視野に入れたうえで、そのステップから専任職員による質の高い図書館サービスが実現できるはずである。利用者からは、大学図

書館であるがゆえ、本来のグレードの高いサービス展開が期待されることを、図書館は肝に銘じなければならぬのである。

3 期待されるビジョンの行方

図書館サービスと外部化

以上から、本学図書館のビジョン、すなわち「関西大学図書館がめざす方向」のあり方について考察してみると、次の三つの大きな観点に立って具体的な施策を展開していくことが大事であると考えられる。一つは図書館のサービスそのものについてであり、何が図書館存立の意義なのか問い、それを核に置いてアピールすることである。第二は図書館業務の外部化ということである。第三は、この両者の大きな視点に立って具現化策を考え、積極的に推進する“度量”がなければならない。実行する力量がともなわなければ、かけ声に終わることは目に見えている。端的にいえば、今後将来にむけて図書館が認知されていくということは、“図書館のやる気”と“利用者のニーズ”がぶつかっていくところにある。

(1) 図書館のサービス

では、図書館のサービスとはなにか。つまり図書館の存立とアピールについて考えてみよう。

図書館は端的にいえば、サービス機関である。図書館から図書資料の閲覧、貸出、外部情報資源へのアクセスなどを直接提供するサービスは、利用者にとって直接便益が得られるサービスであって、これをパブリックサービスというが、利用者から高い評価が示されることこそが図書館の存在意義であり、究極の目標といってよい。

しかし、高く評価される図書館サービスを実現しようとする、図書館利用者から直接評価される機能ではないが、パブリックサービスを支える業務がまた重要なウエイトをもっている。それは、図書資料の選択であり、外部情報資源の確保であり、これらを迅速に整備し提供できるようにするものでなければならない。いわばもう一方のサービス、換言すればテクニカルサービスと呼ばれるものである。(以上、パブリックサービスとテクニカルサービスの概念については、藤野幸雄ほか著『図書館情報学入門』によった)。両者とも、図書館でいえばコア業務である。図書館の職能集団は、ここに真価を発揮しなければ自他とも認知されない、といていい

すぎではないだろう。

本学図書館は、学習図書館機能と研究図書館機能を総合兼備している。では、はたして、それぞれの機能における「サービスの内容、サービスの目標」を明確に示してきたであろうか。「研究者サービスに力をいれます」といっても、「どのように」と問われると、大変難しいことではあるが、その前に具体的に「研究者サービスではこのようなサービスを行います」と明示しているかといえ、断言しえない。している、といってもそのアピール性に乏しいのではないか。平成12年度、新大学院棟と直結するところに研究者カウンターを設置した。研究者から求められていることは何か、ニーズに応えさらにニーズを高める手だては何か、早急にサービスのイメージを提示して、アピールしなければならない。

(2) 図書館活動の外部化

つづいて、図書館活動の外部化とはなにか。図書館が取り組まざるを得ない必然性と、今後のあり方について考察する。

ア 図書資料・情報の外部化

情報が量的に増大していく。さすれば、図書費の制約から図書資料の収集力が低下するし、その提供サービスの能力も相対的に低下していく。その一方で、サービスの拡大が強く要求されてくる。サービス能力のない図書館と、サービスの拡大要求に応じない図書館は魅力を失い、マーケティング論という顧客満足は得られず、顧客という利用者は図書館から離れていく。この図書館に迫り来る環境変化に対応して図書館活動をしていくためには、新しい方向転換を求められるのである。これにはまた2つの観点が重要になる。その一つは、図書館の資料・情報の外部化であり、もう一つは企業経営という事業の外部化である。

前者についていえば、外部情報資源へのアクセスを容易にすることである。図書館界では、いままで“ACCESS versus HOLDING”という議論があった。たとえば、雑誌のコレクションを考えると、研究教育を支援するのに必要な基本の雑誌、すなわちコア・ジャーナルを一定の基準で所蔵し、さらに研究教育に特徴的に必要なジャーナルを付加することはもっとも必要な資源の確保、つまりHOLDINGであった。

ところが、「たとえば、300タイトルあれば利用要

求の90%の要求を満たせるが、95%を満たすのには700タイトル必要となり、水準を98%に上げると2000タイトルも必要となるという事実を考慮すると、情報資源の効用は順次低くなるのであり、必要な情報資源がすべて一様な効用をもっているわけではない。つまり、“追加される1タイトルの購入に要する費用に対して、それが利用される量は漸次下がってゆく”という、いわば“収穫逓減の法則”がこの場合にも当てはまるのである」(永田治樹著『学術情報と図書館』)。図書館運営としての判断は、各タイトルの効用を予算という一定の基準のかねあいで、HOLDINGを見合わせるようになってしまうのである。

大学の報告書にあるように、大学院学生は研究に必要な図書・資料の入手に12%以上の者が困難を感じており、教員研究者も同様であろうから、本学に所蔵しない文献資料を全国規模、世界規模で求める需要が増える。外部化とは、第一に図書館間の相互協力に他ならない。他大学等外部に所在する学術資料を利用するため、NACSISのILLシステムの有効活用をはじめ、各種ネットワークを通じて、文献資料収集の支援を活発にすることで、学術資料のアクセシビリティの向上を図ることに腐心することである。

永田氏が前掲書にいうように、“ネットワーク化した図書館”を実現するにはなお越えなければならない障害があり、その一つである「利用者側からいえば、“図書館の事務的な手続きが資料や情報を利用しづらくしている”」との指摘には、自館内部の問題は何か、外的障害は何かを明らかにして、それぞれを取り除く努力がはらわれるべきである。

イ 外部データベースの活用

第二に、外部データベースの有効利用である。図書館では、ビジョンの大きな柱である「学術情報を提供するためのメディアの多様化に対応しうる図書館」をめざして、「電子図書館機能」の充実、とくに、ネットワーク上で展開する情報サービスの提供に取り組んでいることは既に述べたし、本学図書館が“学術情報のセンター的機能を果たす”という基本理念にもとづいている。

今後とも、ネットワーク上の情報源である外部データベースの利用については、その特性と対費用効果を勘案して、利用範囲を可能な限り拡大すべきサービスであり、ライセンス契約等の事務手続の効

率化、新しいカテゴリーの情報を発掘することからしても、一元化した全学的な取扱が必要である。図書館はその任にあることを認識し、さらに全学の理解と協力を求めていかなければならない。つまり、情報のシームレスな提供である。ACCESSかHOLDINGのACCESSなのである。情報へのアクセスを容易にすることが図書館の大きな任務といえよう。

加えて重要なのは、外部情報資源の有効活用も、計画進行中の「図書館オープンシステム化」の成否にかかっている。本学図書館の特徴をいかに発揮できるシステムづくりに、全学をあげて待望されているのである。

ウ アウトソーシングの導入

本学図書館が図書館業務の一部を外注化したのは、昭和59年からの総合図書館開設前である。それは、図書館の電算システムについて自館開発を旨としながら一部のシステム開発を業者委託したこと、外部に書誌ユティリティーが発展したことに伴い図書の整理業務と目録情報の作成を委託したものである。後者については、業務の効率化に鑑み可能な限りアウトソーシングの活用を努めてきた。

アウトソーシングの活用はいうまでもなく、単なる外注を意味しない。人的資源の有効活用であり、外部機能の活用であって、図書館本来の業務と共存するものである。業務を「丸投げ」するものではない。

図書館は平成12年度に、それまでの4課を機能的な3部門(課)に統合し、合理的な人員配置を旨とし利用サービスの拡大に対処するため、2年の計画完成をめざして閲覧業務に大幅なアウトソーシングの導入を図っている。これは、閲覧サービスの企画、管理運営のマネジメント業務、およびレファレンス業務等コア業務を除くおおかたの業務を対象にしている。図書館における閲覧サービスは、開館日数の増加と開館時間の延長はさらに求められ、一方で、繁忙期であれ、平常時であれ、利用者に一定の能力と知識を有した質的レベルを維持した継続的なサービスが求められることによる。この面での点検・評価の手を加え、利用者の満足度をあげていく必要がある。

図書館サービスに直結する上記以外の業務については、スリム化を図るとともに徹底したアウトソーシング活用も考えなければならない。図書館の収集

整理業務は、以前にも増して柔軟性とスピード化が求められており、基幹業務としての質的強化が求められている。図書館のオープンシステム化と連動した「外部システム」の導入計画の実現もまた、図書館の使命を達成する鍵をにぎってしよう。

(3) 人材育成の問題

ここで、当委員会がこの関連の点検・評価をおこなうにおいて、委員のなかから重要かつ示唆に富んだ意見が出された。つまり、図書館ビジョン7項目のうち、第5項目と第6項目の「人材育成」と「アウトソーシング導入」をどう整合をもたせるか、という問題である。

以下に、その意見と指摘事項をほぼそのまま掲げておくが、とくに前者の人材育成について、「図書館が展開する諸事業を支えることができる人材の育成に努力を傾注する」という目標に、関西大学図書館がどのように取り組み、どのような成果があげられたのか、残念ながら今回の点検においては見えてこなかったのである。

図書館がこのことについて何も策を講じてこなかった、と指摘しているのではない。図書館は現今の厳しい諸環境のなかで、種々腐心していることはよく承知しているし、すぐに効果があらわれてくるものでもないことも分かっている。利用者の側からすれば、なかなか見えてこないこの重要な問題こそを、図書館はどのようなスタンスで取り組んでいるのか、その具体施策は何なのか、期待される効果に対してどのような到達状況にあるのか、これらの点を明らかにしていくべきであるというのである。

【意見・指摘の内容】

関西大学図書館においては、ビジョンの第6項目にあるように「アウトソーシングの積極的活用」が確固たる方針として掲げられている。図書館あるいは高等教育機関がアウトソーシングを導入することにより、どのような影響をもたらされるのか、これについては多角的かつ永続的な検討が必要であろうし、外部委託への依存が自前の図書館専任職員の人材育成を阻害することに結びつかないかという懸念は、多くの人が抱くものであろう。

したがって、ビジョン7項目のなかに上掲第5項目の「人材育成」と、第6項目の「アウトソーシング導入」とがきちんと並列され

ていることには大きな意味があるものと考えられる。そうしたアウトソーシングを活用するなかで、今回の点検の過程では、いかに図書館が「人材の育成に努力を傾注」したのか、そのポイントを掴みえなかったのが、評価を加えることができなかつたのである。

これでは、7項目に焦点を合わせてきたといいいながら、いささか不十分であるし、また精力的に取り組んでいるアウトソーシングに対しても、無用な誤解や懸念を生みかねない。アウトソーシングによるスタッフに対してどのような研修・指導がおこなわれているか、そしてそのみならず、それによって本学の専任スタッフのあいだに、いかなる正・負の影響があったのか、そしてこれに図書館はどう対処したのか、あらためて、点検・評価をおこなう必要があると考える。

スタッフの育成の方法は種々あろう。図書館のサービスは、利用環境の拡大とともに、サービスの質的向上をはからなければならない。

そのため、図書館業務の情報化と専門化がますます進むなかで、コアとなる業務は何なのかを踏まえ、スタッフ育成、技能増進の諸施策を講じていかなければならないことは、いうまでもない。また、図書館の体制として基本の姿勢が示めされ、計画的な人材育成プログラムが設定されて、なおかつ、その目標管理にしたがって効果が測られ、次なるステップを目指すものでなければならぬことは当然である。

その一方で、日頃スタッフが種々討議し検討していくことも大事であって、その研修活動の成果がいろんな場面で発表でき、機関誌に積極的な発表がされていってよい。『関西大学図書館フォーラム』もその発表の場であろう。スタッフのあいだにおいて、刺激を与える場が必要なのである。聞くところによると、館内で勉強会が組織され研鑽が積み重ねられているし、学外への派遣研修も経年的に実効をあげているという。

関西大学の図書館職員は、いうまでもなく関西大学の職員であるが、しかし一般の職員とは異なった「図書館員」であることもまた事実である。利用者は当然のことながら、その専門性に期待を寄せる。要するところ、そう

した期待に、図書館がどう応えようとしているのか、それを見せて欲しいのである。

加えるならば、今後将来を考えると、若い人材の登用とともに、各業務に関してコアになる人材を育成していかなければ、ビジョンの第2項目の「本学独自の事業を展開する」こともできていかないものと、危惧する。また、オープンシステム化計画も進捗できそうであるが、関西大学構成員の利用者のもとより、学外の大学などの求めに応じて、どの程度まで本学図書館が応えられているか、これもまた力量が問われ図書館ばかりでなく大学の評価にもつながると思料する。

人材の育成に関して関西大学図書館がこれまで展開してきた活動を総括するとともに、より高度な図書館・情報学の学習と研究、そして利用者(=関西大学に所属する研究者)が専門とする諸分野の基礎的知識、文献情報の修得のために、スタッフに対するどのような施策が考えられるか、今後本格的な検討が必要であろう。関西大学全学の協力を得ることができれば、相当のプログラムを提供することも可能である。

また、そこからさらに人事政策全般に関しても、図書館として提起すべき問題が明らかになってくるであろう。専任職員のジョブ・ローテーションのあり方の見直し、(実際は契約上難しいが、)アウトソーシングによって得られた優秀な人材の専任職員への登用など、専門機関として、現場での経験をふまえた大胆な提案をすることが、自己点検・評価活動において本来求められていることではなかろうか。

おわりに

上記の3の冒頭に示した第三は、“サービス”と“外部化”の、この両者の視点に立って“推進する度量”のことである。

図書館のビジョンが全学的に認知され、それにもとづく各具体的施策を展開していくのに、図書館の手順や了解をえる途上に紆余曲折があったが、大学の力添えと法人の財政的理解をえながら、困難で厳しい状況のなかで、種々実現の目安がついてきている。図書館の取り組み姿勢が評価されていることに

まちがいはないであろう。

この期待と図書館利用者の期待を裏切ってはならない。ビジョンの推進過程はできるだけ開示して、多くの意見に耳を傾け、図書館に迫り来る急速な環境変化に迅速に対応する必要がある。図書館の力量がまさに問われているところである。本学のいずれの部署でもそうであるが、腰をすえてやる気概のある人的集団、つまりは専門的ジェネラリストを育成し確保していかなければ、図書館ビジョンは宙にういてしまう。

前途はなおきびしいものが予測されるが、“めざ

すべき道”はつけられた。20世紀末に策定した図書館ビジョンは新しい21世紀に付託できるよう、その方向を示したものである。既に本文であげたように、アウトソーシングの導入、オープンシステム化計画の実現、外部情報資源の積極的な導入など具体的施策もいくつか実現の緒についている。一方で、研究者サービスの充実等懸案事項も多々ある。

ビジョンを策定し、具体的施策を講じ、図書館が総力をあげて取り組んでいること、このことがまた、自己点検そのものであるといえよう。盤石な図書館にするために、いまが、まさに正念場なのである。

自己点検・評価関係資料

1 基礎データ(平成12年度)

(1) 入館者に関する統計	
a 月別開館日数.....	(18)
b 所属・学年別入館者数(総合図書館).....	(19)
c 時期別・月別・時間帯別総入館者数及び 1日平均入館者数(総合図書館).....	(19)
d 利用者別月次入館者数と平均入館回数(総合図書館).....	(21)
(2) 図書資料の利用に関する統計	
a 月別図書利用者数並びに利用冊数.....	(22)
b 月別入庫検索者数.....	(23)
c グループ閲覧室利用状況.....	(23)
d 文献複写サービス.....	(23)
e 図書館間相互利用.....	(24)
f 参考業務.....	(24)
g 利用指導.....	(24)
(3) 督促関連の統計	
a 年間資格別督促件数.....	(25)
b 督促作業実施状況.....	(25)
c 予約延滞図書の督促.....	(25)
(4) 蔵書に関する統計	
① 収書状況	
a 図書形態資料異動状況.....	(26)
b 非図書形態資料異動状況.....	(26)
c 雑誌・新聞受入種類数.....	(26)
分類別所蔵図書冊数.....	(26)
分類別所蔵雑誌種類数.....	(27)
図書資料購入費5カ年の推移.....	(27)
③ その他関連統計等	
a 過去5年間の月別開館日数.....	(28)
b 図書館職員数.....	(28)
c 書誌データ遡及入力作業状況.....	(28)
d 展示の開催テーマ.....	(29)
e 資料の出陳・放映.....	(30)

(1) 入館者に関する統計

a 月別開館日数

月別 館別	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
総合図書館	29	27	28	28	17	23	30	27	26	24	15	22	296

高槻図書室	24	23	24	23	13	20	24	23	19	20	15	22	250
-------	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----

- ・夏期特別開館 8月28日～9月1日(ただし、高槻図書室は閉室) ・夏期一斉休業 8月11日～20日
- ・冬期特別開館 12月26日～27日(ただし、高槻図書室は閉室) ・冬期一斉休業 12月28日～平成13年1月6日
- ・入学試験等による休館 平成13年1月31日～2月8日
平成13年2月28日～3月2日

b 所属・学年別入館者数（総合図書館）

所属		学年別				合 計
		1 年	2 年	3 年	4 年	
第 1 部 学 生	法	49,239	37,421	50,114	33,899	170,673
	文	44,782	45,851	40,787	37,045	168,465
	経 済	34,168	26,434	29,355	24,617	114,574
	商	33,510	24,068	26,624	27,873	112,075
	社 会	45,512	31,901	29,025	26,366	132,804
	総 情	420	719	1,508	1,267	3,914
	工	69,893	70,893	59,447	55,017	255,250
	1 部 計	277,524	237,287	236,860	206,084	957,755
第 2 部 学 生		17,002	13,677	11,433	13,597	55,709
学部学生合計		294,526	250,964	248,293	219,681	1,013,464
大学院学生						80,467
教 職 員						23,314
校 友						47,979
そ の 他						23,152
合 計						1,188,376

注 その他には、第 1 部・第 2 部の科目等履修生や聴講生等を含む。

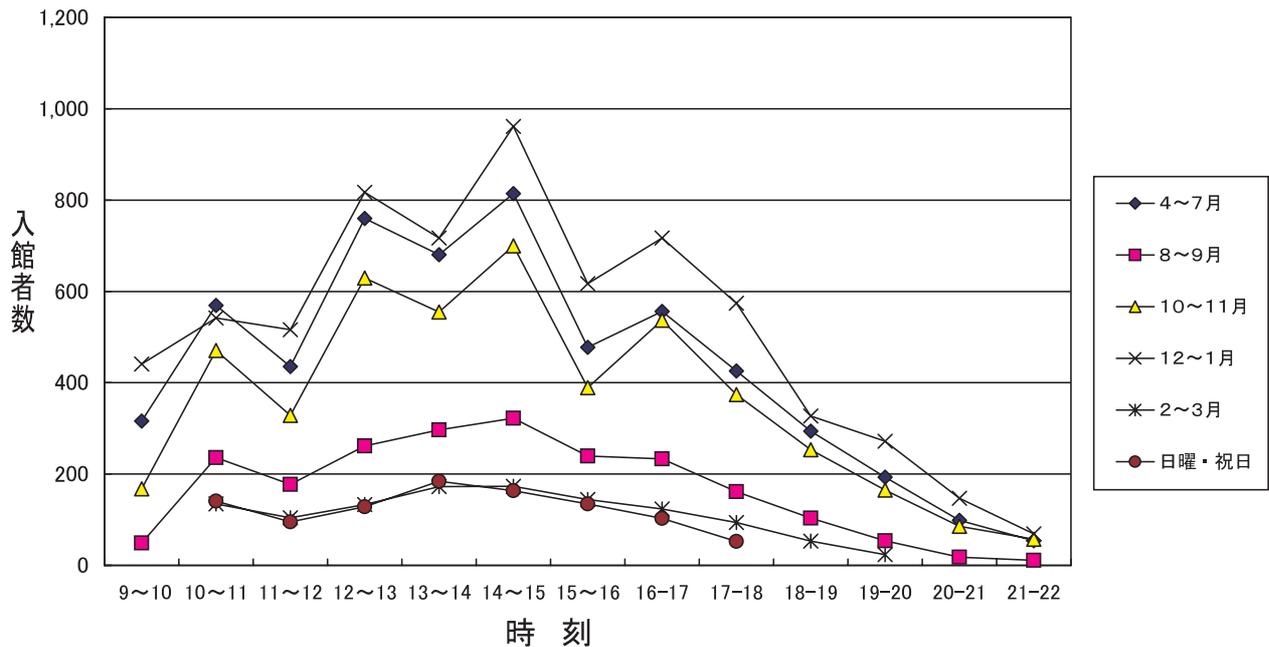
c 時期別・月別・時間帯別総入館者数及び 1 日平均入館者数（総合図書館）

月	開館日数	時間帯	9～10	10～11	11～12	12～13	13～14	14～15	15～16	16～17	17～18	18～19	19～20	20～21	21～22	合 計
4 月	24	総入館者	4,728	11,412	8,809	14,586	13,463	15,743	9,291	9,579	7,070	4,674	2,859	1,318	783	104,315
		1日平均	197	476	367	608	561	656	387	399	295	195	119	55	33	4,346
5 月	23	総入館者	5,267	13,542	8,651	17,220	14,131	17,553	9,311	12,022	8,733	6,338	3,949	1,886	1,163	119,766
		1日平均	229	589	376	749	614	763	405	523	380	276	172	82	51	5,207
6 月	24	総入館者	5,532	13,976	9,339	18,394	15,637	19,991	10,736	13,627	10,329	7,821	4,510	2,337	1,510	133,739
		1日平均	231	582	389	766	652	833	447	568	430	326	188	97	63	5,572
7 月	23	総入館者	14,193	14,590	14,146	21,204	20,713	23,260	15,550	17,026	13,895	8,771	6,872	3,726	1,583	175,529
		1日平均	617	634	615	922	901	1,011	676	740	604	381	299	162	69	7,632
小計	94	総入館者	29,720	53,520	40,945	71,404	63,944	76,547	44,888	52,254	40,027	27,604	18,190	9,267	5,039	533,349
		1日平均	316	569	436	760	680	814	478	556	426	294	194	99	54	5,674
8 月	17	総入館者	-	2,866	1,958	2,516	3,611	3,314	2,933	2,337	1,461	1,061	392	-	-	22,449
		1日平均	-	169	115	148	212	195	173	137	86	62	23	-	-	1,321
9 月	21	総入館者	1,853	6,113	4,772	7,432	7,654	8,944	6,172	6,516	4,666	2,864	1,645	694	421	59,746
		1日平均	88	291	227	354	364	426	294	310	222	136	78	33	20	2,845
小計	38	総入館者	1,853	8,979	6,730	9,948	11,265	12,258	9,105	8,853	6,127	3,925	2,037	694	421	82,195
		1日平均	49	236	177	262	296	323	240	233	161	103	54	18	11	2,163

月	開館日数	時間帯	9~10	10~11	11~12	12~13	13~14	14~15	15~16	16~17	17~18	18~19	19~20	20~21	21~22	合計
10月	24	総入館者	4,390	11,778	8,281	15,673	13,897	17,343	9,368	12,956	9,263	6,329	3,883	2,005	1,406	116,572
		1日平均	183	491	345	653	579	723	390	540	386	264	162	84	59	4,857
11月	23	総入館者	3,497	10,347	7,166	13,917	12,191	15,558	8,923	12,269	8,306	5,566	3,853	2,020	1,283	104,896
		1日平均	152	450	312	605	530	676	388	533	361	242	168	88	56	4,561
小計	47	総入館者	7,887	22,125	15,447	29,590	26,088	32,901	18,291	25,225	17,569	11,895	7,736	4,025	2,689	221,468
		1日平均	168	471	329	630	555	700	389	537	374	253	165	86	57	4,712
12月	21	総入館者	2,867	8,856	6,683	12,708	11,142	15,010	9,123	11,940	8,074	4,944	3,220	1,583	1,215	97,365
		1日平均	137	422	318	605	531	715	434	569	384	235	153	75	58	4,636
1月	19	総入館者	14,784	12,799	13,966	19,984	17,533	23,450	15,544	16,728	14,881	8,142	7,652	4,301	1,542	171,306
		1日平均	778	674	735	1,052	923	1,234	818	880	783	429	403	226	81	9,016
小計	40	総入館者	17,651	21,655	20,649	32,692	28,675	38,460	24,667	28,668	22,955	13,086	10,872	5,884	2,757	268,671
		1日平均	441	541	516	817	717	962	617	717	574	327	272	147	69	6,717
2月	15	総入館者	-	1,943	1,358	2,064	2,645	2,697	2,218	1,790	1,485	783	341	-	-	17,324
		1日平均	-	130	91	138	176	180	148	119	99	52	23	-	-	1,155
3月	21	総入館者	-	2,898	2,405	2,727	3,565	3,543	2,981	2,647	1,892	1,121	496	-	-	24,275
		1日平均	-	138	115	130	170	169	142	126	90	53	24	-	-	1,156
小計	36	総入館者	-	4,841	3,763	4,791	6,210	6,240	5,199	4,437	3,377	1,904	837	-	-	41,599
		1日平均	-	134	105	133	173	173	144	123	94	53	23	-	-	1,156
日祝 開館	41	総入館者	-	5,771	3,891	5,271	7,562	6,702	5,511	4,227	2,159	-	-	-	-	41,094
		1日平均	-	141	95	129	184	163	134	103	53	-	-	-	-	1,002
年度 合計	296	総入館者	57,111	116,891	91,425	153,696	143,744	173,108	107,661	123,664	92,214	58,414	39,672	19,870	10,906	1,188,376
		1日平均	193	395	309	519	486	585	364	418	312	197	134	67	37	4,015

注1 各月の開館日数および入館者数には、日曜祝日開館に係る数値を含まない。
 2 1日平均に関わる数値は四捨五入している。

時間帯別1日平均入館者数



d 利用者別月次入館者数と平均入館回数（総合図書館）

	利用区分	第1部法	第1部文	第1部経	第1部商	第1部社	総情	工	第2部	大学院	大学教員	合計
4月	入館者	15,575	14,556	9,955	9,726	10,998	284	21,731	4,750	9,233	2,184	98,992
	利用対象者	3,476	3,593	3,576	3,433	3,874	2,425	5,874	1,816	1,531	1,698	31,296
	平均入館回数	4.5	4.1	2.8	2.8	2.8	0.1	3.7	2.6	6.0	1.3	3.2
5月	入館者	17,498	17,894	10,146	10,107	13,054	318	27,770	5,338	9,798	2,093	114,016
	利用対象者	3,472	3,590	3,573	3,431	3,869	2,424	5,870	1,812	1,530	1,695	31,266
	平均入館回数	5.0	5.0	2.8	2.9	3.4	0.1	4.7	2.9	6.4	1.2	3.6
6月	入館者	18,741	19,687	12,506	11,649	14,346	412	31,454	5,810	9,481	2,044	126,130
	利用対象者	3,472	3,590	3,572	3,429	3,868	2,423	5,868	1,810	1,530	1,697	31,259
	平均入館回数	5.4	5.5	3.5	3.4	3.7	0.2	5.4	3.2	6.2	1.2	4.0
7月	入館者	23,778	21,639	24,886	15,993	20,814	534	53,234	7,584	8,051	1,797	178,310
	利用対象者	3,471	3,590	3,572	3,429	3,866	2,418	5,867	1,809	1,530	1,695	31,247
	平均入館回数	6.9	6.0	7.0	4.7	5.4	0.2	9.1	4.2	5.3	1.1	5.7
8月	入館者	2,779	2,600	1,140	1,335	1,602	142	3,850	893	3,410	1,014	18,765
	利用対象者	3,471	3,590	3,572	3,428	3,866	2,418	5,867	1,809	1,530	1,694	31,245
	平均入館回数	0.8	0.7	0.3	0.4	0.4	0.1	0.7	0.5	2.2	0.6	0.6
9月	入館者	8,635	10,339	4,770	5,958	6,612	246	8,578	3,028	6,230	1,454	55,850
	利用対象者	3,463	3,580	3,568	3,423	3,865	2,397	5,854	1,791	1,510	1,654	31,105
	平均入館回数	2.5	2.9	1.3	1.7	1.7	0.1	1.5	1.7	4.1	0.9	1.8
10月	入館者	16,432	19,893	10,319	11,227	15,494	461	22,861	5,587	9,107	2,089	113,470
	利用対象者	3,463	3,579	3,566	3,423	3,862	2,395	5,847	1,790	1,507	1,654	31,086
	平均入館回数	4.7	5.6	2.9	3.3	4.0	0.2	3.9	3.1	6.0	1.3	3.7
11月	入館者	14,612	17,793	8,253	11,355	12,889	435	21,709	5,101	7,411	1,884	101,442
	利用対象者	3,463	3,579	3,564	3,423	3,862	2,395	5,842	1,789	1,504	1,650	31,071
	平均入館回数	4.2	5.0	2.3	3.3	3.3	0.2	3.7	2.9	4.9	1.1	3.3
12月	入館者	16,206	18,248	8,337	9,413	12,631	318	17,380	5,013	6,139	1,577	95,262
	利用対象者	3,463	3,578	3,562	3,420	3,862	2,395	5,839	1,788	1,504	1,650	31,061
	平均入館回数	4.7	5.1	2.3	2.8	3.3	0.1	3.0	2.8	4.1	1.0	3.1
1月	入館者	29,367	21,641	20,947	22,288	20,858	322	41,289	10,994	5,961	1,424	175,091
	利用対象者	3,459	3,570	3,550	3,410	3,857	2,391	5,830	1,770	1,499	1,650	30,986
	平均入館回数	8.5	6.1	5.9	6.5	5.4	0.1	7.1	6.2	4.0	0.9	5.7
2月	入館者	2,454	1,860	1,466	1,031	1,578	248	2,352	598	2,532	749	14,868
	利用対象者	3,459	3,565	3,550	3,410	3,857	2,391	5,830	1,770	1,499	1,649	30,980
	平均入館回数	0.7	0.5	0.4	0.3	0.4	0.1	0.4	0.3	1.7	0.5	0.5
3月	入館者	4,596	2,315	1,849	1,993	1,928	194	3,042	1,013	3,114	1,083	21,127
	利用対象者	3,459	3,565	3,550	3,410	3,857	2,391	5,830	1,770	1,499	1,648	30,979
	平均入館回数	1.3	0.6	0.5	0.6	0.5	0.1	0.5	0.6	2.1	0.7	0.7
合計	入館者	170,673	168,465	114,574	112,075	132,804	3,914	255,250	55,709	80,467	19,392	1,113,323
	平均利用対象者	3,466	3,581	3,565	3,422	3,864	2,405	5,852	1,794	1,514	1,670	31,132
	平均入館回数	49.2	47.0	32.1	32.7	34.4	1.6	43.6	31.1	53.1	11.6	35.8

注1 学部・大学院の利用対象者は毎月末の在学者数を示す。

2 平均入館回数とは、入館者数を利用対象者で割った、一人当りの平均入館回数である。

3 合計の利用対象者は、4月から3月までの平均を示す。

4 大学教員は、専任教員と非常勤講師の合計を示す。

(2) 図書資料の利用に関する統計

a 月別図書利用者数並びに利用冊数

利用区分		月 別												合 計	
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
総 合 図 書 館	館内 閲 覧	学部学生	959	1,484	1,793	1,550	413	1,137	2,579	2,413	2,662	1,756	176	207	17,129
			2,042	3,060	3,759	2,887	1,115	2,810	6,136	5,949	6,388	3,606	453	450	38,655
	大学院学生	148	193	162	148	81	122	184	142	158	101	57	75	1,571	
		308	409	396	348	213	317	408	333	338	206	148	188	3,612	
	教職員	42	49	45	42	46	39	64	52	30	35	23	36	503	
		97	135	113	123	143	109	156	108	80	128	63	86	1,341	
	学外者	175	228	214	231	205	167	201	214	169	178	103	131	2,216	
		732	1,140	1,290	1,181	1,029	736	789	915	763	745	567	796	10,683	
	計	1,324	1,954	2,214	1,971	745	1,465	3,028	2,821	3,019	2,070	359	449	21,419	
		3,179	4,744	5,558	4,539	2,500	3,972	7,489	7,305	7,569	4,685	1,231	1,520	54,291	
	館外 貸 出	学部学生	12,272	17,901	21,947	24,431	3,222	10,340	20,731	20,106	22,106	29,478	2,357	2,439	187,330
			21,299	31,613	38,689	45,809	6,837	19,629	37,255	36,161	42,361	61,798	5,197	5,043	351,691
		大学院学生	1,952	2,053	2,046	1,799	761	1,256	2,055	1,673	1,598	1,568	585	536	17,882
			4,179	4,151	4,156	3,941	1,994	2,768	4,405	3,560	3,782	3,959	1,450	1,234	39,579
教職員		650	643	621	638	342	471	655	548	437	471	277	344	6,097	
		1,884	1,544	1,441	1,692	1,011	1,126	1,558	1,280	1,083	1,327	755	943	15,644	
学外者	680	694	724	669	483	513	556	513	505	391	305	387	6,420		
	1,612	1,547	1,657	1,595	1,134	1,160	1,288	1,201	1,442	1,069	737	1,216	15,658		
計	15,554	21,291	25,338	27,537	4,808	12,580	23,997	22,840	24,646	31,908	3,524	3,706	217,729		
	28,974	38,855	45,943	53,037	10,976	24,683	44,506	42,202	48,668	68,153	8,139	8,436	422,572		
合 計	16,878	23,245	27,552	29,508	5,553	14,045	27,025	25,661	27,665	33,978	3,883	4,155	239,148		
	32,153	43,599	51,501	57,576	13,476	28,655	51,995	49,507	56,237	72,838	9,370	9,956	476,863		
高 槻 図 書 室	館内 閲 覧	学部学生	1,005	1,424	1,794	1,606	149	625	1,561	1,666	1,300	1,368	143	83	12,724
			1,575	2,366	2,835	3,022	332	1,029	2,523	2,798	2,270	2,750	322	167	21,989
	大学院学生	103	79	91	119	43	55	90	68	66	63	41	18	836	
		236	194	174	331	107	135	183	165	145	198	122	61	2,051	
	教職員	17	27	27	20	18	27	40	30	19	25	14	11	275	
		41	64	42	36	73	51	78	45	28	40	21	16	535	
	学外者	7	10	8	6	1	2	3	5	4	1	0	3	50	
		13	18	16	8	4	5	9	7	6	1	0	6	93	
	計	1,132	1,540	1,920	1,751	211	709	1,694	1,769	1,389	1,457	198	115	13,885	
		1,865	2,642	3,067	3,397	516	1,220	2,793	3,015	2,449	2,989	465	250	24,668	

注1 館内閲覧・館外貸出ともに上段は利用者数、下段は利用冊数を示す。

2 館内閲覧とは、図書館利用規程第9条第2項による申込利用をいう。

3 館外貸出とは、図書館利用規程第14条による利用をいう。

4 高槻図書室は館外貸出のみとし、教職員数にはティーチング・アシスタントの大学院学生を含む。

b 月別入庫検索者数

利用区分		月 別												合 計	
		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月		
総合図書館	入庫検索	学部学生	546	1,338	1,903	1,786	729	1,268	2,478	2,490	2,665	2,270	355	314	18,142
		大学院学生	2,557	3,170	3,098	3,013	1,278	2,024	2,878	2,359	2,140	2,030	816	958	26,321
		教職員	907	908	839	827	596	729	911	783	681	641	399	583	8,804
		その他	54	62	55	66	37	56	82	74	67	69	32	21	675
		計	4,064	5,478	5,895	5,692	2,640	4,077	6,349	5,706	5,553	5,010	1,602	1,876	53,942

注1 入庫検索とは、図書館利用規程第13条による利用をいう。

2 「その他」とは、特別の事由により入庫を許可された研究員等を示す。

c グループ閲覧室利用状況

月別	区分	利用コマ数	利用者数
4月		104	1,598
5月		132	1,977
6月		146	2,322
7月		110	1,929
8月		59	1,184
9月		98	1,603
10月		197	2,913
11月		175	2,510
12月		117	1,901
1月		45	546
2月		17	224
3月		16	216
合 計		1,216	18,923
日 平均		4.8	74

注 総合図書館における利用状況である。

d 文献複写サービス

種別・月別		区分	総合図書館	高槻図書室
			枚 数	枚 数
電 子 式 複 写	4月		213,091	2,059
	5月		113,183	2,946
	6月		255,002	3,824
	7月		258,129	9,153
	8月		139,348	570
	9月		107,018	1,796
	10月		213,733	3,878
	11月		236,240	3,797
	12月		329,475	3,748
	1月		317,024	8,732
	2月		124,403	402
	3月		121,570	954
	小 計		2,428,216	41,859
	カラー複写		4,549	
	合 計		2,432,765	41,859
日 平均		8,218.8	167.4	

マイクロ複写	プリント	学内者(コマ数)	8,351	12
		学外者(コマ数)	2,510	0

e 図書館間相互利用

種別 月別	国 内								国 外							
	提 供				依 頼				提 供				依 頼			
	閲覧	貸出	複写	合計	閲覧	借用	複写	合計	閲覧	貸出	複写	合計	閲覧	借用	複写	合計
4月	51	42	368	461	19	40	266	325	0	0	0	0	0	0	9	9
5月	51	37	427	515	29	28	247	304	0	0	0	0	0	0	7	7
6月	47	41	369	457	32	46	364	442	0	0	0	0	0	0	14	14
7月	63	29	372	464	47	35	407	489	0	0	0	0	1	0	4	5
8月	52	10	158	220	26	19	147	192	0	0	0	0	5	0	6	11
9月	78	43	429	550	19	27	247	293	0	0	0	0	0	0	19	19
10月	61	34	435	530	47	42	381	470	0	0	0	0	0	0	15	15
11月	37	41	468	546	31	38	363	432	0	0	0	0	0	0	14	14
12月	56	22	347	425	35	15	228	278	0	0	0	0	0	0	10	10
1月	47	19	281	347	14	23	292	329	0	0	0	0	0	0	6	6
2月	17	14	197	228	13	33	124	170	0	0	0	0	0	0	6	6
3月	31	16	231	278	13	16	189	218	0	0	0	0	5	0	3	8
合 計	591	348	4,082	5,021	325	362	3,255	3,942	0	0	0	0	11	0	113	124

f 参考業務

区 分	学 内 利 用 者				学 外 利 用 者			合 計	
	教 職 員	大学院生	学 部 生	そ の 他	校 友	諸 機 関	そ の 他		
調 査	所 蔵	51	64	19	3	3	-	2	142
	事 項	22	32	22	20	1	-	7	104
	そ の 他	-	-	-	-	-	-	-	-
	合 計	73	96	41	23	4	-	9	246
I R サービス	日経テレコン	9	9	22	31	-	-	-	71
	J O I S	7	0	0	32	-	-	-	39
	D I A L O G	8	0	1	26	-	-	-	35
	L E X I S	6	61	2	53	-	-	-	122
	NACIS - IR	0	2	1	16	-	-	-	19
	合 計	30	72	26	158	-	-	-	286

g 利用指導

種 別	件 数	人 数
図 書 館 ツ ア ー	-	277
オ ン ラ イ ン 目 録 の 検 索	-	163
C D - R O M の 使 い 方	-	110
文 献 の 探 し 方 (1)	88	1,834
文 献 の 探 し 方 (2)	-	87
上 位 年 次 生 の 入 庫 案 内	-	3,129
新 入 生 向 け の ガ イ ダ ン ス	42	1,549

注1 はゼミ等のクラス単位、 は個人単位で行う。
 2 は授業クラス単位で行い、内容・時間帯については希望に応じる。

(3) 督促関連の統計

a 年間資格別督促件数

資 格		督促件数
第1部学生	法	360
	文	391
	経 済	588
	商	425
	社 会	518
	総 情	483
	工	768
第 2 部 学 生		311
大 学 院 学 生		722
専 任 教 員		402
非 常 勤 講 師		138
関 西 三 大 学		44
そ の 他		142
合 計		5,292

b 督促作業実施状況

実施日	対象者	督促件数
2000 . 5 . 29	専任教員以外	797
2000 . 7 . 3	専任教員及び名誉教授	262
2000 .10 . 4	専任教員以外	1,507
2000 .11 . 1	専任教員及び名誉教授	191
2000 .12 . 4	専任教員以外	979
2001 . 1 .18	卒業・修了見込者	612
2001 . 2 .15	卒業・修了見込者	761
2001 . 3 .13	卒業・修了見込者	183
合 計		5,292

注1 返却期限内に返却されなかった図書（延滞図書）の督促。

- 2 専任教員以外とは、学部学生、大学院学生、非常勤講師、校友、科目等履修生、聴講生、研究生、専任事務職員、定時事務職員、優待、留学生、委嘱研究員、関西三大学の教員、関西三大学の大学院学生、その他特別許可者などである。
 関西三大学：関西学院大学、同志社大学、立命館大学

c 予約延滞図書の督促

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合 計
件 数	61	54	147	175	4	110	115	145	181	325	8	3	1,328
冊 数	65	55	148	179	4	115	115	162	181	341	8	3	1,376

注 延滞図書の中で、特に他の利用者から希望があった図書の緊急の督促

(4) 蔵書に関する統計

収書状況

a 図書形態資料異動状況 (単位:冊)

区分	種別	和書		合計
		和書	洋書	
取得内訳	購入	33,768	11,931	45,699
	受贈	2,478	379	2,857
	その他	3,700	5,767	9,467
	合計	39,946	18,077	58,023
除籍抹消		14,409	124	14,533
増減計		25,537	17,953	43,490
期末在高		1,072,319	660,941	1,733,260

b 非図書形態資料異動状況 (単位:点)

区分	種別	マイクロ資料		AV資料		ニューメディア		
		フィルム	フィッシュ	オーディオ	ビデオ	CD-ROM	DVD	その他
取得内訳	購入	5,974	434	2	20	236	0	30
	受贈	0	0	0	3	2	0	0
	その他	382	123	19	178	16	0	0
	合計	6,356	557	21	201	254	0	30
除籍抹消		0	0	0	0	0	0	0
増減計		6,356	557	21	201	254	0	30
期末在高		75,675	16,765	473	1,393	569	1	924

注 中国語・ハングル書は、和書に含める。

以下の統計についても同様とする。

c 雑誌・新聞受入種類数 (単位:種)

区分	種別	雑誌			新聞		
		和	洋	合計	和	洋	合計
取得内訳	購入	2,074	2,948	5,022	23	41	64
	受贈	2,091	295	2,386	28	1	29
	その他	61	17	78	5	5	10
	合計	4,226	3,260	7,486	56	47	103

分類別所蔵図書冊数(日本十進分類法による)

分類	内訳	和	洋	合計
000	総記	124,251	20,445	144,696
010	図書館	4,903	2,332	7,235
020	図書, 書誌学	12,773	9,301	22,074
030	百科事典	3,402	2,374	5,776
040	一般論文, 講演集	13,472	947	14,419
050	逐次刊行物	25,571	12,674	38,245
060	学会, 団体	934	329	1,263
070	ジャーナリズム, 新聞	11,291	2,830	14,121
080	叢書, 全集	49,078	10,021	59,099
090	郷土資料	1,100	1,458	2,558
	総記・計	246,775	62,711	309,486
100	哲学	3,419	4,511	7,930
110	哲学各論	1,788	3,000	4,788
120	東洋思想	13,974	540	14,514
130	西洋哲学	5,593	14,830	20,423
140	心理学	9,359	11,882	21,241
150	倫理学	2,585	1,127	3,712
160	宗教	4,003	2,760	6,763
170	神道	1,907	38	1,945
180	仏教	11,095	1,267	12,362
190	キリスト教	4,918	6,245	11,163
	哲学・計	58,641	46,200	104,841
200	歴史	5,257	9,063	14,320
210	日本史	37,805	860	38,665
220	アジア史, 東洋史	23,481	2,824	26,305
230	ヨーロッパ史, 西洋史	4,094	13,014	17,108
240	アフリカ史	257	528	785
250	北アメリカ史	681	1,900	2,581
260	南アメリカ史	78	70	148
270	オセアニア史	41	115	156
280	伝記	15,438	5,875	21,313
290	地理, 地誌	26,409	7,313	33,722
	歴史・計	113,541	41,562	155,103

分類	内訳	和	洋	合計
300	社会科学	9,656	6,162	15,818
310	政治	28,860	33,304	62,164
320	法律	52,761	73,718	126,479
330	経済	73,243	80,142	153,385
340	財政	5,685	4,976	10,661
350	統計	5,497	5,184	10,681
360	社会	38,414	38,867	77,281
370	教育	33,738	10,523	44,261
380	風俗習慣, 民俗学	12,596	3,044	15,640
390	国防, 軍事	2,559	890	3,449
	社会科学・計	263,009	256,810	519,819
400	自然科学	7,410	6,545	13,955
410	数学	9,031	13,256	22,287
420	物理学	5,938	12,913	18,851
430	化学	6,664	12,963	19,627
440	天文学, 宇宙科学	1,349	737	2,086
450	地球科学, 地学	4,516	3,543	8,059
460	生物科学, 一般生物学	5,327	6,629	11,956
470	植物学	953	286	1,239
480	動物学	1,556	371	1,927
490	医学, 薬学	11,690	6,512	18,202
	自然科学・計	54,434	63,755	118,189
500	技術, 工学	13,713	18,884	32,597
510	建設・土木工学	12,833	8,428	21,261
520	建築学	12,737	5,278	18,015
530	機械・原子力工学	8,601	6,946	15,547
540	電気・電子工学	19,380	16,151	35,531
550	海洋・船舶工学	948	283	1,231
560	金属・鉱山工学	4,809	5,674	10,483
570	化学工業	5,872	6,360	12,232
580	製造工業	3,017	1,205	4,222
590	家政学, 生活科学	1,100	236	1,336
	技術・計	83,010	69,445	152,455

分類別所蔵図書冊数（続き）

分類	内 訳	和	洋	合 計
600	産業	4,121	267	4,388
610	農業	9,659	3,474	13,133
620	園芸,造園	813	113	926
630	蚕糸業	176	10	186
640	畜産業,獣医学	515	61	576
650	林業	938	175	1,113
660	水産業	1,203	149	1,352
670	商業	13,324	11,928	25,252
680	運輸,交通	6,067	4,682	10,749
690	通信事業	2,459	1,819	4,278
産業・計		39,275	22,678	61,953
700	芸術	10,473	4,343	14,816
710	彫刻	696	227	923
720	絵画,書道	13,401	2,473	15,874
730	版画	745	246	991
740	写真,印刷	1,633	377	2,010
750	工芸	3,328	1,260	4,588
760	音楽,舞踏	3,847	845	4,692
770	演劇,映画	9,841	1,355	11,196
780	スポーツ,体育	5,201	495	5,696
790	諸芸,娯楽	1,031	86	1,117
芸術・計		50,196	11,707	61,903

分類	内 訳	和	洋	合 計
800	言語	3,160	8,489	11,649
810	日本語	7,596	152	7,748
820	中国語,東洋の諸言語	6,010	784	6,794
830	英語	5,273	3,677	8,950
840	ドイツ語	1,078	3,706	4,784
850	フランス語	1,007	2,492	3,499
860	スペイン語	464	272	736
870	イタリア語	95	332	427
880	ロシア語	326	641	967
890	その他の諸言語	306	688	994
言語・計		25,315	21,233	46,548
900	文学	10,904	8,447	19,351
910	日本文学	87,742	1,342	89,084
920	中国・東洋文学	21,305	556	21,861
930	英文学	7,822	18,592	26,414
940	ドイツ文学	2,951	10,767	13,718
950	フランス文学	3,760	11,252	15,012
960	スペイン文学	1,440	10,268	11,708
970	イタリア文学	358	330	688
980	ロシア文学	1,466	2,324	3,790
990	その他の諸文学	375	962	1,337
文学・計		138,123	64,840	202,963
合 計		1,072,319	660,941	1,733,260

分類別所蔵雑誌種類数（日本十進分類法による）

分 類	内 訳	和	洋	合 計
000	総 記	4,315	1,019	5,334
100	哲 学	459	500	959
200	歴 史	893	319	1,212
300	社会科学	3,899	3,269	7,168
400	自然科学	792	906	1,698
500	技 術	1,931	1,589	3,520
600	産 業	707	365	1,072
700	芸 術	641	167	808
800	言 語	261	234	495
900	文 学	1,518	436	1,954
合 計		15,416	8,804	24,220

図書資料購入費5ヵ年の推移

（単位：円）

		平成8年度	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度
冊 子	和 書	196,521,234	198,451,593	191,270,498	177,050,346	178,872,490
	洋 書	290,894,021	209,764,089	237,601,567	165,810,749	183,244,866
ニューメディア		8,457,952	9,820,275	13,654,993	14,443,283	8,522,633
マイクロ資料	フィルム	34,473,447	83,608,926	35,723,089	50,301,932	81,121,343
	フィッシュ	21,262,923	17,495,305	19,897,914	47,960,644	18,468,995
A V 資料		821,674	451,804	216,241	126,285	96,390
合 計		552,431,251	519,591,992	498,364,302	455,693,239	470,326,717

注 平成11年度までは高槻図書室分は含まない。

(5) その他関連統計等

a 過去5年間の月別開館日数

館別	月別	年 度	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
	総合図書館	平成8年度		28	27	28	26	15	21	29	26	24	23	15	23
平成9年度			28	29	28	26	13	23	29	25	24	23	16	22	286
平成10年度			28	27	28	29	13	21	29	26	24	23	15	22	285
平成11年度			28	27	29	28	14	21	28	26	24	22	16	20	283
平成12年度			29	27	28	28	17	23	30	27	26	24	15	22	296

高槻図書室	平成8年度	24	24	23	24	12	19	25	23	19	20	22	23	258
	平成9年度	24	26	22	24	11	18	25	21	20	20	17	23	251
	平成10年度	24	23	24	25	11	18	25	21	20	20	16	24	251
	平成11年度	24	22	25	24	12	17	24	22	20	20	17	24	251
	平成12年度	24	23	24	23	13	20	24	23	19	20	15	22	250

b 図書館職員数(平成12年4月1日現在)

	専任職員	定時職員	合 計
図 書 館	1	-	1
運 営 課	10(4)	5(5)	15(9)
閱 覧 参 考 課	18(13)	36(24)	54(37)
学 術 資 料 課	14(9)	14(11)	28(20)
高 槻 図 書 室	3	5(5)	8(5)
合 計	46(26)	60(45)	106(71)

()内は、女子で内数

c 書誌データ遡及入力作業状況(第1次7ヵ年計画分)

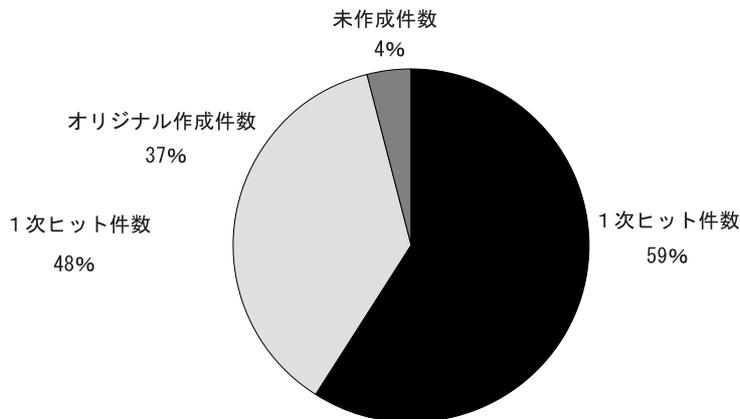
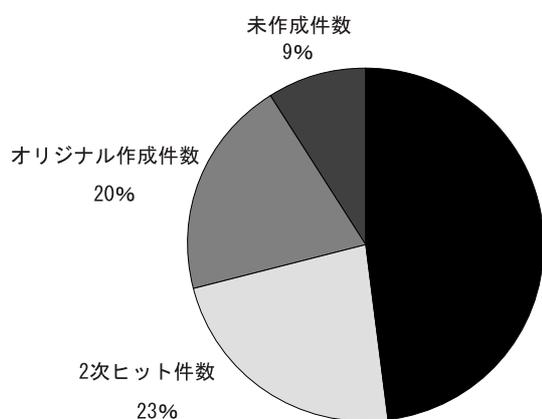
分類	区分 内訳	和 書			洋 書		
		遡及対象件数	遡及済件数	未作成件数	遡及対象件数	遡及済件数	未作成件数
000	総 記	43,232	28,289	14,943	8,238	8,222	16
100	哲 学	26,465	21,031	5,434	19,210	19,151	59
200	歴 史	45,355	44,932	423	12,877	12,352	525
300	社会科学	72,907	69,311	3,596	79,412	77,864	1,548
400	自然科学	13,110	12,269	841	13,662	13,503	159
500	技 術	15,369	14,986	383	20,122	20,089	33
600	産 業	10,938	10,843	95	6,583	6,265	318
700	芸 術	13,469	11,253	2,216	3,637	2,893	744
800	言 語	6,496	5,407	1,089	6,206	5,393	813
900	文 学	58,689	56,763	1,926	30,688	30,226	462
	参考図書	30,109	28,127	1,982	29,582	28,120	1,462
	そ の 他	45,478	43,093	2,385	13,244	10,272	2,972
	合 計	381,617	346,304	35,313	243,461	234,350	9,111

注1 日本十進分類法(NDC)による分類

2 「その他」とは、貴重・準貴重書、大型本、個人文庫等をいう

遡及状況（和書）

遡及状況（洋書）



d 展示の開催テーマ（平成11年度～平成12年度）

年 度	テ ー マ	期 間
平成11年度	春季 「聖書コレクション」	平成11年4月1日～5月22日
	夏季 「大阪の雑誌創刊号 明治期」	平成11年6月14日～7月30日
	秋季 「作家の自筆展 上方文藝玉手箱」 記念講演会 「三島由紀夫初期作品の問題 - 川端康成との往復書簡を契機として - 」	平成11年10月4日～11月13日 平成11年10月25日 図書館ホール
	冬季 「この国の字書と辞書」	平成11年12月6日～平成12年1月15日
平成12年度	春季特別 「本草への招待 本草書とその周辺」	平成12年4月1日～5月20日
	秋季特別 「生誕70周年記念 開高健展」 記念講演会 対談「開高健を語る」	平成12年10月16日～12月16日 平成12年11月18日 図書館ホール

e 資料の出陳・放映(平成12年度 学外からの依頼分)

依頼機関	目的・展示会等の名称	会 期	掲載・借用依頼資料
[出品] 大阪市立美術館	特別展 「人のすがた 人のことば - 肖像画賛」	H .12 .10 .31 ~ 12 .3	蒹葭堂世肅像 紙本墨画 [C2 289.15 K2K 1]
[出品] 社団法人 霞会館	「将軍吉宗と宮廷雅」展	H .12 .10 .28 ~ 12 .10	象之絵物語 [C 721.8 Z1 1] 象版画 [C2 721.8 Z1 1] 渡来大象之図 [C2 721.8 T1 1] 詠象詩 [919.5 03 1] 享保十四己酉年四月交趾国象上京之次第記 [C2 210.56 K1 1] 富士見象 [C2 210.56 K1 2] 此度従関東御召被為登候象之形 [C2 210.56 K1 3] 此度従関東御召被為登候象之形 [C2 210.56 K1 4] 象のかわら版 [C2 489.7 1]
[放映] (株) テレビキッズオフィス	「知ってるつもり?! (日本テレビ)の番組内で放映	H .12 .8 .6 21 : 00 ~ 21 : 54	曲亭馬琴「新累解脱物語」 [913.65 T1 3-1/5]
[放映] NHK大阪放送局	韓国KBS釜山放送局の特集ドキュメンタリー「300年前の対馬には朝鮮語学校があった」(仮題)の番組用	H .12 .7 .10(撮影日)	芳洲外交関係資料・書翰集 雨森芳洲関係資料調査報告書等十数点
[出品] 神戸ファッション美術館	企画展 「20世紀の名作椅子 200人の200脚展」	H .12 .9 .9 ~ 11 .5	アドルフ・ロース 1984年刊 [520.8 A165 1]
[放映] (株) アマゾン	「ハイビジョンギャラリー・この素晴らしきモノたち~折り紙」(NHK衛星ハイビジョン放送)の番組内で放映	H .12 .12 .4 23 : 00 ~ 23 : 45	西川祐信「西川筆の海」 (影印叢書作成時の写真)
[放映] 日本放送協会大阪放送局	「その時歴史が動いた・坂本龍馬暗殺事件」(NHK総合テレビジョン)の番組内で放映	H .12 .11 .15 21 : 15 ~ 21 : 58	伝記(第9巻5号)
[放映] RKB毎日放送	「蜂の巣城闘争」の番組制作	放映中止	室原文庫資料

2 関西大学図書館自己点検・評価委員会規程

制定 平成6年1月28日

(設置)

第1条 大学の教育研究水準の向上を図るとともに、図書館における自己点検・評価の取り組みを推進するために、自己点検・評価に関する規程を定め、図書館自己点検・評価委員会(以下「委員会」という。)を置く。

(任務)

第2条 委員会は、図書館における教育研究の支援活動及び管理運営の自己点検・評価の取り組みを行うため、次の事項を行う。

- (1) 自己点検・評価の方針の策定及び点検項目の設定
- (2) データの収集、分析並びに検討
- (3) 報告書の作成

(各機関の協力)

第3条 委員会は、前条第2号に規定するデータ収集のため、それに係わる各機関に対して協力を求めることができる。

(報告)

第4条 委員会は、自己点検・評価の結果を図書委員会に報告するとともに、大学自己点検・評価委員会の求めに応じて報告を行う。

(構成)

第5条 委員会は、次の者をもって構成する。

- (1) 図書館長
- (2) 図書館次長
- (3) 図書委員のうちから図書館長が指名する者若干名
- (4) 図書館事務組織における各課から各1名

(委員長等)

第6条 委員会に委員長を置き、図書館長をもって充てる。

2 委員長に事故あるときは、図書館次長がその職務を代行する。

(運営)

第7条 委員会は、委員長が招集し、その議長となる。

2 委員会は、委員の3分の2以上の出席をもって成立し、議事は出席委員の過半数をもって決する。

3 委員会は、必要に応じて、委員以外の者に出席を求め、その意見を聴くことができる。

(事務)

第8条 委員会の事務は、運営課が行う。

附 則

この規程は、平成6年4月1日から施行する。

附 則

この規程(改正)は、平成8年4月1日から施行する。

附 則

この規程(改正)は、平成12年4月1日から施行する。

3 平成12年度 自己点検・評価委員会名簿

*印は作業部会委員を示す。

	氏 名	備 考
規程第1号の委員	山 野 博 史*	委員長、図書館長
規程第2号の委員	船 越 一 英*	図書館次長
規程第3号の委員	竹 下 公 視	経済学部教授(～平成12年9月30日)
	杉 本 貴 志	商学部助教授
	西 本 秀 樹	総合情報学部教授
	小 田 廣 和	工学部教授
	北 川 勝 彦	経済学部教授(平成12年10月1日～)
規程第4号の委員	山 崎 秀 樹*	運営課課長補佐
	田 中 文 子*	閲覧参考課課長補佐
	瀧 本 洋 子*	学術資料課課長補佐

【事務局】運営課課長補佐・山崎 秀樹